

## 大先生の合気

### A. はじめに

天の浮橋について調べていた時、ハワイの合気道三元会のブログで“Floating Bridge of Heaven”と訳されていることを知りました。日本語でもよく理解できない概念を英語に置き換えて理解しようとされていることを知り、頭が下がる思いと、日本語が分かるはずの日本人が「大先生のお話は難しくて分からなかった」ということで済ましていてはならないという強い思いがしました。

Floating bridge といえば <http://www.nauticexpo.com/prod/marine-floor-europe/floating-bridges-24116-396079.html> の写真のようなものをイメージするでしょうし、『古事記』などの知識があれば Wikipedia の「国生み」などに掲載されている「天瓊（あめのぬぼこ）を以て滄海（そうかい）を渡るの図」（小林永濯〈こばやし えいたく〉・画）に描かれている雲の橋をイメージするでしょうか。



この合気道三元会が、「合気」の意味について合気道と大東流の著名な先生方の意見をまとめていて、そこに大先生の「この道は、天の浮橋に最初に立たなければならないのです。天の浮橋に立たねば合気は出て来ないのです」という言葉が引用されています。 <http://www.aikidosangenkai.org/blog/survey-says-aiki/>

このブログの大東流合気柔術 練心館の前田武氏の言葉までは、『月刊フルコンタクト KARATE』の 1996 年 1 月号の特集「秘技・合気の秘密」からの引用だと思います。この大先生の言葉も含めて、その後に掲載されている方々の言葉は他の資料から引用して付け加えられているようです。

改めて『月刊フルコンタクト KARATE』の記事を引用します。

「・櫻井文夫（合気道 SA 代表師範）

合気は相手が固体化したときに出やすいんです。人体には多くの関節があり、バラバラに動いているの

で、なかなか固体化することはありませんが、「腕を強く握ってごらんさい」などと、あらかじめ教示を与えておくんです。すると、筋肉が緊張して腕が固体化し、合気がかかりやすくなる。

よく合気道家の先生が自分の力を誇示するために腕を握らせたりするのは、相手を固体化させるためなんです。強く握れば握るほど、相手の思うツボなんですよ。

かりに強く握らなかったとしても、上手な人なら膝を使った早い動きで、相手に一瞬ビクッとさせておいて、その反射を利用して瞬間的に合わせるんです。ちょうど、釣りをして、魚が餌に食らいついた瞬間に、竿を合わせるような感じで。

でも、本当に合気を使いこなせるというのなら、演武などの約束事ではなく、自由な戦いの中でも使いこなせるはずなんです。そうは言っても、先ほど述べたように、合気にはいろいろな身体的条件の一致が必要となるわけで、自由な戦いの中でそれを使いこなすには、合気そのものに変革が必要なんです。

にもかかわらず、現行合気道は自由な発想での戦いを忌み嫌って、やっていることは派手に飛んでみせる演武と、素人相手に奇術師まがいの合気技を見せることでしょう。

合気にも2種類あると思うんですよ。一つは静的な状況（自由な戦い）で使われる合気。現行合気道は《静の合気》ばかり追求して、《動の合気》については検証しようとすらしめない。僕に言わせれば、現行合気道がやっている合気は、ただのマジック・・・合気マジックにすぎませんよ。

#### ・高岡英夫（運動科学研究所所長）

合気道では、力線をずらしたり、タイミングや弾みを利用したり、テコの原理を利用したりという、巧みな力学的技術のエッセンスを総称して「合気」と言い、またそうした技術を充分に発揮するための土台となる自己と相手の認識・意識的関係をも「合気」という概念を含めている流派が多いようです。

合気柔術は、合気道に比較して、そういう考え方を採用する流派は少ないですね。合気柔術では、概して「合気」を巧妙な力学的技術のエッセンスとしてではなく、相手の運動制御機構そのものを自己の支配下に置きコントロールする技術のエッセンスとして考える場合が多いのです。

力学的段階の合気を「第一の合気」とすると、これは相撲のいなし、腕の返し・押っつけ・投げなどや空手の蹴りに対するすくい投げなどの熟達した実例はいくらでもふくまれていることが分かります。言い換えれば力学的には損な関係の中で“相手に勝る筋力”で制することを許容するかどうか。これが「第一の合気」についての、合気道と他の格闘技の違いということになるのです。合気道とは、こうした筋力性をゼロに、反対に「第一の合気」を100%に近づける徹底した努力と言えるでしょう。

運動制御機構を支配する合気を「第二の合気」とすると、この初歩的な実例は、柔道の「崩し」などにも見ることができます。「体の崩し」ではある種の体幹起立筋の反射（つんのめり反射）を巧妙に引き起こしてやることで、一瞬運動制御機構に混乱を起こし支配下に置くことを狙います。つんのめり反射を僅かでも引き起こすことができれば、その後の技は格段に掛け易くなるわけです。しかしこうした生理反射のみを利用するのは、「第二の合気」としては初歩の初歩と言わざるを得ません。

#### ・森恕（大東流合気柔術琢磨会 総務長）

私たちが考えている合気というのは、「無意識的な防御反応、あるいは防御本能に基づく動きをこちらで刺激して身体操作をすること」。これが合気の神髄だと思うんですね。

柔術の場合は、相手の身体を動かして、倒したり、投げたり、抑えたりということも目的としています。だから、相手の身体操作方法に技法のエッセンスが集まってくる。そのエッセンスを集めて、さらにその上に意識的動きを封じて本能的動きを誘い出して倒す・・・そのためのコツ、心得、考え方が合気だと思います。

だから、視点の置き方が、従来の人がやっている剣技を中心にした＜仕手＞側の心法ではなく、柔術は＜受け手＞側の心法でないといけないのではないかな。それに注目してやるのが合気柔術ではないかと思っているわけです。

＜仕手＞についての心法というのは、気の力とか呼吸法とか、言わば「力」に注目したものになってくるか、あるいは武田時宗先生が「先々の先」だとかいう言い方をして、タイミングというところに視点が置かれているんですが、受け手の心法に注目すると、「＜受け手＞の防御本能や反応に注目する技法」に結実していくんです。

ですから、心法と身法を分けるとすれば、大東流合気柔術は心法であり、単純な身体技術ではない。だけど、相手の心や神経、本能に着目した技術ですから、変な言い方ですけど、「相手の心法」ではないかな。身法をふまえた心法、それも相手の心・・・神経、本能を含めた、相手の心法に注目した技術です。

#### ・井上祐助（大東流合気柔術幸道会 総本部長）

言葉や文章ではなく、実技を通じて伝えてゆくべきものであるだけに、定義したり、本に書いたりしたこともありません。人とそれぞれの個性というものがあるように、修業の過程でその者の個性ないし特徴を見ながら、「それを伸ばしてやるにはどうすればよいのか」という部分に重点を置いて教えています。そ

の結果、私と違った合気を身につけたとしても構わないと思います。それがその人の持ち味なのですから。

・ **近藤勝之**（大東流合気柔術本部 本部長）

大東流の技は5つの基本（礼儀、目付、呼吸、間合、残心）を習得し、合気による崩しに加わることで完成します。柔術の崩しと合気による崩しは異なるので、必ずしも合気＝崩しではありませんが、最初の段階では「崩し」と理解してよいでしょう。相手の虚をついて崩すこともあります。合気による崩しは相手が触れた瞬間に崩していなければなりません。そのためにも、基本の修得が必要不可欠となるのです。

・ **前田武**（大東流合気柔術 練心館 師範）

「集中力」ではなく、触れることで相手を無抵抗にさせることだと思います。接点から気を出して、丹田から足へと伝えることによって相手を動けない状態にしてしまう。あとは投げようが倒そうが、こちらの意のままです。師匠の松田敏美には「力を入れるな」と教わりました。師の手を握ったときの感触を覚えておいて、あとは自分でいろいろ試行錯誤することで身につくはず。私の場合には30年ぐらいかかりましたね。

・ **吉丸慶雪**（合気練体会 主宰）

合気というものは伸筋を使い相手を崩す「技術」で、その原理は全て合理的に説明が出来ます。そして多くの人が気と呼んでいるものは、この伸筋の力を指しているもので、神秘的な意味での「気の力」は存在しません。ただ、この伸筋の働きは、使っている人が「力を使っている」という意識が出来ないため、多くの人はこれを指して「気の力」と呼んでいるわけです。ですから合気と気は分けて考える必要があるのです。

・ **望月稔**（総合武道養正館 館長）

合気の気は「やる気」。すなわち闘志です。闘志と闘志のぶつかり合い。それが合気道だと思います。気には強いものもあれば弱いものもある。しかし、それらは修練によって強くなるものです。私のところにも女か男か分からないような若者が入門してきますが、稽古が進むにつれて、道場での態度も引き締まってくる。つまり、やる気が出てくる。やる気のある者は、より積極的に稽古の取り組むようになる。それが大切なのです。

・ **藤田昌武**（財団法人合気会 本部道場師範）

合気会は合気道を国内外に推進・普及している中心団体として活動していますが、合気という言葉自体を特別に取り上げ定義・説明はしていません。合気道は競技体系を持っていませんので、約束稽古・型稽古を通じて体の鍛錬をすると同時に、相手と合い和する心の鍛錬を目的にしています。そして、こうした稽古を通じて、誰もが持っている合気も養われ、発揮されてゆくと考えています。

・ **斉藤守弘**（合気道 茨城道場 師範）

合気道はそもそも植芝盛平先生から伝わったもので、先生から伝えられた合気を、現在正しく伝えているのはうちしかない。今の多くの合気道家は、合気を求めるあまり、先生の伝えた稽古を疎かにしている。それでは合気を得ることは出来ない。合気は本来誰もが持っているものだが、それは正しい型の稽古を繰り返すことにより習得しなければならず、それなくして合気を得ることは無い。

・ **中野仁**（合気道養神会 本部道場師範）

合気を得るには、理屈によるものと体によるものがあります。どちらも合気という答を求めているのですが、戦後の新しい流派の多くは、過程を飛ばして理屈により答えを求めているようです。私達はそれと違い、基本動作や指導稽古等の過程、体を使った稽古を通じて合気を習得する方法をとっています。また、合気は必ずしも神秘的なものではなく、敵との間合いや殺気を感じる等のことも含めて合気であると思います。」

それぞれの先生方が「合気」というものをどのように捉えられているかを知ることが出来ると思います。

藤田昌武先生の「合気という言葉自体を特別に取り上げ定義・説明はしていません」は、先生が総務部長であった当時の財団法人合気会 合気道本部道場としての公式に近い見解だと思います。合気道では大東流でいう「合気」のような取り上げ方はしていません、ということのようです。

斉藤守弘先生の「合気道はそもそも植芝盛平先生から伝わったもので、先生から伝えられた合気を、現在正しく伝えているのはうちしかない」という説明は「武産合気」という「合気」を指して言われているようです。斉藤先生は、「近ごろ、武産と言う言葉を簡単に口にしてしているが、武産とはいったいなんであるか分かっているのだろうか、何なのか分かっているならば、少なくとも日本の合気道はかなりの進歩があつて良いはずである。武産とは合気道の原理を研鑽することにより、無限の技が生まれてくると言う、実技の問題である」（1993年 茨城県合気道連盟だより第16号）という言葉が遺されています。

望月稔先生の「合気の気は『やる気』。すなわち闘志です」というのは、如何にも望月先生らしいきっぱりとした捉え方だと思いますが、「合気は愛気じゃよ」という大先生の説明とは異なっているのではないのでしょうか。大先生について習っていた時期が皇武館道場時代なので、その当時は「やる気」で良かったのかもしれませんが。確かに『武道』（昭和13年刊）には「氣勢を以て」という言葉が何か所か出ています。

最近（とは言っても、大先生の没後、大東流のことが世に知られるようになってから）、「大東流の合気」とこれに対比して「合気道の合気」という言葉が使われるようになっていたので、『月刊フルコンタクト KARATE』の特集はそれに沿ったものだと思います。これは、「大東流の合気」がとても不思議で素晴らしいものであると認識されるようになったことに因ると思いますが、私は、「大東流の合気」と少し違ったもの（modifyしたもの）として「合気道の合気」があると考ええると大先生のおっしゃられた合気（又は合気道）が後進に正しく伝わらないのではないかと危惧します。

『合気』という名は、昔から有るが、『合』は『愛』に通じるので、私は自分の会得した独特の道を『合気道』と呼ぶ事にした。従って、従来の武芸者が口にする合気と私の言う合気とはその内容が根本的に異なるのである。（植芝盛平監修・植芝吉祥丸著『合気道』p.50）

『合気』という名は、昔から有るが」と言われているとおり、「合気（あいき）」という言葉は一刀流では「**合打** 敵と打合ってどうしても合打となって中々勝負がつきにくいことがある。われが面を打つと敵も面を打ち、敵が小手を打つにわれも小手を打ち、われ突に出ると敵も突いてくる。吾が一尺進むと敵も一尺進み、われが五寸退くと敵も五寸退く、いつまでたっても合気となって勝負がつかない。遂には無勝負か共倒れになることがある。これは曲合（間合）が五分と五分だからである。こんな時は合気をはずさなければならない。合気をはずすのには先ず攻防の調子を変えなければならない。わが遅速長短の調子の旋律を急に変え、横縦上下の喰違いの形をとり、心に於て敵の気を離れ、互いに引張りを解き放し、敵強引にくれればわれふわりとはずし、敵無為となればわれ厳しく打つ。かく手を変え品をかえるとわが曲合の利が生れてくる。これを利してそこに乾坤一擲の大技をかけると目が覚めるような新鮮な勝が我手中に帰する事になる」（笹森順造著『一刀流極意』）と述べられている意味で古くから使われていました。本来の言葉「相機」が「相気」から「合気」へと変わったのではないかと考えられています。

また、『天真独露』（無住心剣術 小田切一雲）に「兵法諸流、先を取るを以て至要と為す。恐らくは不可也。我先を好めば則ち敵もまた先を取らんと欲す。此則ち先々之先也。是の意にして合気之術也。敵もし我の不意を討たば則ち敵は常に先々、我は以て後也。故に負を蒙る。剣術は無益の数ならんか。然らず。ただ先と後とに拘らずして、無我の体、円空の気を備ふれば、すなわち千変万化して勝理常に己に有り。人、恬淡虚無なれば、その気乾坤に充滿し、その心古今に通徹す。神霊万像に昭臨して、白日晴天に麗らかなる如し。一物前に現るれば、見聞に随て、意已に生じ、気已に動く。若しこれに執着すれば、則ち神霊忽ち昏晦して浮雲大虚を覆ふが如く、最初の天真之妙心を失却して、散乱亀動の妄意に転倒せむ。これ

則ち合気の為す所なり。平日の工夫修養合気を離るるの一法にあるのみ」とあり、一刀流と同じく攻防の調子（拍子）が敵と同じになってしまうという意味で「合気」という言葉を使っています。

大先生の言葉のように「合気」や「相気」「相機」という言葉が昔からあったのは確かで、2011年11月24日にブログ（八千代合気会 師範ブログ）で取り上げた時には「武田惣角師も小野派一刀流を修めているので、大東流の合気は『敵強引にすればわれふわりとはずし』辺りからの連想で名付けられたものではないでしょうか」という考えを述べました（ただし、一刀流の「合気をはずす」という概念で、意味が真逆になります）。

その後、2012年9月13日に『合気の創始者 武田惣角』（池月映著）を紹介した時、「第二部の『合気の糸口』では、合気の語源が禅密功（気功）の『陰陽合気法』から来たのではないかと推測しています。武田惣角師が語った合気の秘法が『大東流会報』に載りましたが、『陰陽合気法』は呼吸法によって臍下丹田に気を充実させ、気力集中をはかって精神統一をするというもので、五指を握り、静かに入息するを「陰」、五指を強く開き、出息するを「陽」と呼ぶ、とあり、この呼吸法を続けることによって、頭脳明晰となり、眼力は鋭く、『心』『気』『力』一致し、大勇猛心を養い、特に両手十指それぞれの活用により、神通力を高める、と記されています」と述べました。大東流の「合気」は、この「陰陽合気法」から来たというのが著者の研究結果です。

「陰陽合気法（陰の気と陽の気を合わせる法）」は「いんようごうきほう」と読むのが正しいそうですが、「池月映のブログ」の「武田惣角探訪 135 <http://blogs.yahoo.co.jp/ikezuki2/archive/2012/01/22>」にこの考えが詳しく述べられているので次に引用します。

「合気の語源のまとめをします。合気のアイキは語源辞典にはありません。辞書には合気道、大東流が出てきます。剣術用語の合気は相気と同じで、アイキの語感から合気になったと思います。

大東流の説明では合気陰陽法（あいきいんようほう）からきているとありますが、疑問が二つあります。気も陰陽も中国の思想です。陰陽は陰陽五行のように最初にくるもので、熟語で後にくるのは大東流しかない。それも、アイキは日本語の訓読みで、陰陽は音読みになり、四文字熟語として訓読み、音読みがごっちゃになっているのはおかしい。昔の漢文や経典はだいたい音読みです。合気、合気陰陽法はどこから引用したのか、核心部分の説明がない。

史実（大東流内で伝えられている史実）に語られている古事記、新羅三郎、甲斐武田家、会津藩の文献、史料に合気という文字があったという証拠はない。もし、あれば古い言葉になり語源辞典に載っていたでしょう。ないということは新しい言葉といえる。

おそらく、合気は合い気で、間に『い』が入っていた。私は日本では非公開の瑜祇経（真言宗）の修行課程にある禅密功の陰陽合気法から、合気を引用したと考えました。そうすると、アイキではなくゴウキと読むのが正しい。非公開の合気の文字も、インド語の経典瑜祇経と中国の禅密気功が紹介され判明した。

二文字の漢字では、相気、合鍵、気合、場合、寄合、組合などは訓読みで、江戸時代以降の新しい日本語でしょう。大東流の合気陰陽法、合気鍛錬法、合気不動縛り（不動金縛りのこと）、合気ツキなどは戦後の造語だと思います。時宗遺稿集の気合法、神通力法、合気法は密教の修行法です。

では、惣角はどうして合気をゴウキではなくアイキを名乗ったのか。惣角も易師万之丞も本来なら密教を修行できる身分ではない。それも、大本山の高僧ぐらいしかできない高度な修行をしたので、密教の掟もあり真実を語れない。だから、惣角は密教を感じさせない合気（アイキ）を使い、合気の説明を一切しなかった。

植芝盛平は惣角の合気から引用して合気道と名付けた。気を合わせる、愛気などの説明をしています。合

気は気を合わせる技術なのは正しいのでしょうか。剣道、柔道、茶道、華道は音読みですが、合気道は訓読みと音読みの組み合わせで、なんとなく不自然です。ゴウキドウのほうが漢字としては自然です」

一刀流や無住心剣術以外に「合気」という言葉が出てくる近世の文献では、国立国会図書館に『武道秘訣 合氣之術』（武骨居士著、明治 25 年 12 月 10 日出版）と『武道秘訣 合氣之術』（無名氏著、明治 33 年 4 月 26 日発行）が所蔵されています。内容は全く同じもので、「故に合氣の術に要する。迅速無間の読心術を施さんとするには」とか「合氣の術にも、亦一個の得物を要するものあり、曰く、他なし掛声是れなり」と書かれていて、この本では「敵人読心の術」と「掛声の気合」を「合気」としています。

大東流は、武田惣角師が遺している明治 32 年(1899)の『英名録』に「大東流柔術」の字が見られ、この頃から伝授が始まっていますが、『武道秘訣 合氣之術』はそれ以前の発行です。この本の影響があったかどうかは分かりませんが、大東流の「合気」という術理又は技法は伝授を始めた頃からあったと考えるのが妥当だと思います。佐川幸義宗範の父 子之吉氏の 大正 2 年(1913)9 月 3 日のノートに「片手を両手でつかまれたる時、その手を押しだし前より“合気をかけ”後ろにまわり、しょい（背負い）投げること」という記録が遺されているそうです。

また、惣角師も教える時に「技をかけながらホラこれが合気だこれも合気だと言ってやっていた」そうです（大先生も惣角師から「これが合気だ」と言って教えられたことでしょう）。

一刀流、無住心剣術、大東流などの「合気」が、「従来の武芸者が口にする合気」ということになります。

大東流の合気は、武田惣角師は言葉で表わしたことはないと思いますので、惣角師の後を継いだ佐川幸義宗範が与えた定義、「相手を無力化する技術」「敵の力を無にする技術」ということに従って、大先生の合気との違いを明確にしたいと思います。この明確にする目的は、武道流派の比較を論ずるためではなく、稽古の目標を見定めたいがためです。

## B. 合気道という流名

大先生が、武田惣角師の話を聞き、吉田幸太郎氏の紹介で初めて惣角師に会ったのは大正 4 年(1915)2 月のことで、遠軽（えんがる）の駅通（えきてい。人馬の継立、宿泊、時として貨物の運送や郵便取り扱いも行った施設）久田旅館でした。大東流の合気を知ったのもこの時が最初でした。後年、大東流から離れたことで、大先生のことを良くは思っていない佐川宗範の言葉では、「大正 4 年 2 月に吉田幸太郎が遠軽の久田旅館に植芝盛平を連れてきたとき、丁度、父親（子之吉）が教授代理として教えていた。既に柔術をやっていて自信を持っていた植芝は『何、この田舎武芸者が』という感じで偉そうにやって来たので、武田惣角にさんざん技をかけられたうえに極められ、隅で涙を流していたとのことである。武田惣角も『植芝は雁の涙（かりのなみだ、「露」を表す季語、ここでは寒さで雁が流す悲しげな涙に例えて言った）を流した』とよく言っていたそう。しかしこれにより武田惣角の実力を知った植芝はこの武術の修行に夢中になっていった」とのことですが、その場で入門を許され、その後、惣角師の巡回指導にも随行しているので、その時はこの文章のような毒はなかったと思います。

大先生は、この時に惣角師の合気を身をもって体験し、「武田先生には武道の目を開いていただいた」と言う程の出来事となりました。「目を開かれる」ということは「触発される」とか「啓発される」という意味なので、「大東流の合気」は、これ以後、大先生の真の武道開眼に大きな影響を及ぼしたはずです。

大正 11 年(1922)8 月に授けられた目録（伝書）が「合気柔術秘伝奥義之事」で、更に 9 月 15 日に教授代理を許された時にそれまでの「大東流柔術」は「大東流合気柔術」と流名を変更しています。これが「合気」という術理が流名や伝書に取り入れられた最初です。これには出口王仁三郎聖師が「合気」を名乗るよう大先生に勧め、大先生が「合気」を大東流の名に加えることを惣角師に進言し、惣角師がこれを容れて「大東流合気柔術」を名乗った、とする証言があるそうですが、私も事実であったと思います。

当時の師弟関係では、大先生の発案で惣角師に流名変更など申し出ることは憚れることであったと思いますが、惣角師にお渡しした餞別金 4,000 円を聖師が立て替えた（聖師が大先生に「貸すから」と言って与えた）ことから考えて、王仁三郎聖師なら出来たであろうと思います。

その時、王仁三郎聖師のことですから「合気」に「神人合一（神と人との合気）」か「愛気」又は「相生（あいいき、あいき）」という言葉による意味を込めたのではないかと思います。大正 9 年(1920)に大先生が一家を挙げて綾部に移住した時、王仁三郎聖師は、「神人合一の武道を作りなさい」と大先生を励まし、植芝塾を開設しているので、十分に考えられることだと思います。

大正 11 年(1922)の時点では、次に示すように「神人合一」の意が込められていたことは間違いないようです。

『合気』という言葉は古事にも見られるが、その意味は違う（原文は「異う」）ようだ。また道主（大先生）のいう『合気』そのものは、無限に深く、広く、道の発現の真意を至極簡単明瞭に現わし、神人合一の意を簡略にした意味をももつのである」（『合気道開祖 植芝盛平』 p.164）

また、王仁三郎聖師のことですから、既に『武道秘訣 合気之術』などは読んでいたことだと思いますので、その辺りからの発想もあったかもしれません。

吉祥丸二代道主の証言では、「私は小さかったですからはっきりしたことはいえません。文献からいえば大正 11 年(1922)の前半期までは『大東流柔術』で、惣角先生が来てしばらく経って大正 11 年(1922)の暮れ、後半期から『大東流合気柔術』になりました。父は出口さんに合気じゃといわれ、また惣角先生にも話をもっていったらよかろうといわれたのです」（『植芝盛平と合気道 I』 pp.11-12）とされています。この流名変更は術理としての「合気」が素晴らしいものであったという証でもあろうかと思いますが、現在の大東流の合気と大先生が言われる合気の意味が違ってきた端緒となりました。

惣角師による半年間の講習が終わった後のことだと思いますが、吉祥丸二代道主の本では大正 11 年(1922)に「合気武術」と呼称するようになったと伝えられていますが、竹下勇日記には昭和 3 年(1928)2 月 28 日に大東流合気柔術から「相生流合気柔術」に変えたと記されていて、昭和 4 年(1929)に合気武術が出てきます。

この「相生（あいおい）」は、無理をすれば「あいいき、あいき」とも読めるので、王仁三郎聖師の考えが入っていると思います。

もっと後年の昭和 8 年(1933)のこのようですが、甥の井上方軒（鑑昭）先生によると「合気武道という名前は出口王仁三郎先生が付けてくれたのです。大東流（合気）柔術ではおかしいんじゃないかと言ってね。植芝叔父（盛平）を呼んで、『大東流（合気）柔術というのはやめとけ、合気（武道）という名前にしたらいい』といったわけです。（中略）それまでは皇武武道といってました」（『植芝盛平と合気道 I』 p.45）ということなので、大東流から離れる段階で流名が次々と変わったのには、王仁三郎聖師の考えがあったと思います。皇武武道と称したのは、昭和 6 年(1931)の皇武館道場発足後のこのようです。

さて、惣角師が合気の秘法を大先生に伝授されていたかという点、「否」と言うことになると思います。惣角師が唯一伝授したのは行き倒れになっていた惣角師の面倒を見た山本角義氏であったようで、これは佐川幸義宗範にも伝授されていません。それで、昭和 11 年(1936)に大阪朝日新聞社に惣角師が突然現れた時に「植芝にはまだ十分教えておらん。習うなら我より習え」と言われていることは、そのとおりです。

68 歳の時に師の惣角にも出来なかった、触れただけで多数の人を飛ばすことのできる新しい合気の原理を発見した佐川宗範が、「合気の原理は実に細かいものだ、若し聞いたらみんなびっくりしてしまうよ。植芝盛平はわからなかったのであんな風にして教えたのだね」と言っていますが、確かに「大東流の合気」と「大先生の合気」は違っています。

その優劣について佐川宗範の側から論じられていますが、合気上げだけで判断出来るものではない程、大先生の合気は違っています。

前に大先生が惣角師に初めて会ったのは大正 4 年(1915)2 月と述べましたが、公益財団法人 合気会のホームページに「合気道の沿革」があり、そこには、「明治 45 年(1912 年) 遠軽の久田旅館で大東流柔術の武田惣角に会い、教を請う。」と書かれています。合気会に問い合わせたところ、大先生から植芝家に伝わるのは明治 45 年に初会とのことで、大正 5 年(1916)に免状(秘伝目録)を受けているので、大正 4 年が初会だと目録を受けるまでの期間が短すぎて無理があると考えられているそうです(『英名録』の記録や大東流側の関係者の話から大正 4 年(1915)2 月が正しいようです)。

さて、話を戻します。大東流合気柔術第 36 世を継がれた佐川幸義宗範の側から見ると、「合気」が出来ていないのに「合気道」という名称を使って、すっかり本家に乗っ取ったような形になっているのが許せないところではないかと思います。これは、惣角師も同じ気持ちであったようです。

余談になりますが、「植芝に合気は教えていない」とか「こんな手をしてやっていたら百年たっても合気はわからん」という惣角師の言葉からは次に伝えなければならないという嫡伝者としての気持ちが感じられず、大東流は三十何代も続いた武術ではなく惣角師一代で創り上げられた武術だという池月映氏の説が正しい気がします。何代も続いている流儀であれば、数ある弟子の中からこれという者を見出して、一子相伝すれば、自分の代の責任は果たせるので、離れて行った者に拘ることはないと思うからです。

間違いなく、大先生は、まったく新しい合気を見出しています。

もう一度、大先生の言葉を見てみましょう。

『合気』という名は、昔から有るが、『合』は『愛』に通じるので、私は自分の会得した独特の道を『合気道』と呼ぶ事にした。従って、従来の武芸者が口にする合気と私の言う合気とはその内容が根本的に異なるのである」。(植芝盛平監修・植芝吉祥丸『合気道』p.50)

これまで見てきたように「合気」という言葉の意味はいくつかあるので、新しい意味を加えても差し支えないと思います。また、流名に「合気」を加えたのが出口王仁三郎聖師の発案であったことを考えると、大先生が「合気」という言葉を自分が創始した流名に入れても不思議ではありませんし、王仁三郎聖師の意向も含まれていたのではないかと考えられます。なお、流名は「新陰流」と「神影流」、「(香取) 神道流」と「(鹿島) 新当流」の違い以上のものがあり、「大東流合気柔術」と「合気道」とが同じであるという間違いは起こり得ません。

流名でいえば、昭和 17 年(1932)に大日本武徳会が合気道部を作り、呼称を「合気道」とするようになりましたが、当時の「合気武道」では特定の流派の名称になり、さりとて柔術だけではない総合武術を柔道として組み込むことは出来ないのです、一般的な名称をということで「合気道」と命名されたのが最初です。

「講道館から武徳会役員となった久富達夫が主唱したことだと平井稔(皇武館道場総務)が証言している。この時久富は、『総合武術部門は剣杖などの要素も包括的に含めたい。そのため従来から在る各武術流派との軋轢を生じさせぬよう、特定流派を連想させず、また勇ましさを前面に出したものでなく、当たり障りのない柔らかい印象の名前が良い』として『合気道』を提唱した」ということで、異論なく認められています。

この時、大先生は、合気武道が戦闘の手段として使用されることを嫌われて、岩間に隠棲されてしまいます。

終戦後、昭和 23 年(1948)に財団法人の申請に当たり、文部省から「合気道」にするよう勧めがあり（前例に倣ったのでしょう）、それを受け入れて、以後、「合気道」という名称が定着しました。当時は、昭和 17 年(1942)の神示に従って、もっぱら「武産合気」が使われていたようです。

ラジオのインタビューでの質問に大先生は次のように答えています。

(聞き手)「合気道というお言葉は、どういうところからお付けになったのでございますか」

(盛平翁)「付けたんじゃない。国のこれは至宝やからな、個人が勝手に付けるものじゃない。そこでほっといたらやな、文部省の中村光太郎さんの方から、合気道としたらどうだな、という相談があった。で、向こうから合気道とせよということだった。結構な話やから合気道にしようと、こういうことや。その後ですね、付けたものの合気道について、少し自分も調べてみなあいけない」

大先生が、「神人合一の武道」とこの「合気」を結びつけるようになったのには、前述の出口王仁三郎聖師との邂逅がありますが、次のような背景も後押ししたようです。

大正 8 年(1919)12 月 21 日に白滝の家屋敷と 50 町歩余りの土地をそっくり惣角師に無償で譲渡し、一家を挙げて危篤の父の元に向う大先生ですが、「白滝王」と慕われた開拓民を残して白滝を引き上げる段階で、何か問題が生じていたと思います。国事に奔走することを喜びとしていて、開拓団を率いることに責任と生甲斐を感じていた大先生がその責任を放棄した裏には、惣角師との軋轢があったと思います。

大正 7 年(1918)6 月 2 日に上勇別村会議員に当選し、務めを果たしていた大先生ですが、翌年 4 月に 1 年足らずで辞めています。

「公務の仕事がいつさいできなくなってしまった、自分は。(武田先生は)邪魔ばかりするんです。先々先々自分の行くところ邪魔ばかりするもんやから、それでしまい自分の家のようになって入りこんで来て、私の権利書から私の印鑑を全部取られてしまうた」という大先生の語ったテープがあるそうです。

思うに、惣角師が、見込みがあると思って大先生を巡回指導に連れ回すために、公務を優先しようとする大先生の邪魔をしたのではないのでしょうか。惣角師に付いていると身の回りの一切の世話をしなければならず、それで、これ以上開拓団の責任者は務められないと悟って、白滝を離れようとしたのだと思います。開拓事業を進めるか、武術の道を歩むか二者択一を迫られて決断したのだと思います（参考：<http://www2.ocn.ne.jp/~aiki0325/kousatu5.html>）。

その時、開拓民には、田辺に帰って武術を教えると伝えたそうですから、長男（一人息子）として両親（又

は父親は危篤であったので残された母親）の面倒を見なければならないという気持ちもあつての選択ではなかったかと思います。

帰途、綾部に寄り、王仁三郎聖師に会いますが、そこで祈祷料を納めて祈願が終わったら早々に田辺に向うところだと思いますが、案に相違して翌年 1 月 2 日まで逗留しています。これも想像ですが、白滝に決別し、36 歳になった大先生が、これからどうして生きて行こうかという悩みをこの時に打ち明けたのではないかと思います。王仁三郎聖師は霊能者です。只の祈祷だけではなく、この時にカウンセリングのようなものをして悩みを聞いたと思います。

その時にテープで話しているようなことも打ち明けたとすれば、「自分にそなわった武術があるのだから、人が作った武術を習ってはいけませんよ」という聖師の言葉と辻褃が合ってきます。「黙って親の言うことを聞け」と言って育てられた子ではなく、「この子は熊野神社の申し子だ」と言って、一度も父親から声を荒げて叱られるようなことがなかった大先生は、自主独立の人に育っています。したがって、王仁三郎聖師の言はびったり当てはまりました。

「芸術は宗教の母なり」という芸術観を持つ聖師ですから、綾部に来て武芸を生かす道についても説いたと考えれば、その年の春も過ぎようとする頃、母親も同道して一家で綾部に移住したことに納得がいきます。

大正 9 年(1920)春、事前到大先生が綾部移住を決意した旨の挨拶に行くと、王仁三郎聖師は、「あんたが来ることは前からようわかつとった」とひとく喜ばれ、「わしの近侍（外に出る時のお供や身回りのお手伝いをする役）になりなさい。（中略）あんたはな、好きなように柔術でも剣術でも鍛錬することが一番の幽斎になるはずじゃ。武の道を天職とさだめ、その道をきわめることによって大宇宙の神・幽・顕三界に自在に生きることにゃ。大東流とやらも結構だが、まだ神人一如の真の武とは思われぬ。あんたは、植芝流でいきなされ。真の武とは戈を止ましむる愛善の道のためにある。植芝流でいきなされ。大本の神さんが手伝うのやさかい。かならず一道を成すはずじゃ」、ざっとそのような意味の言葉で諭されたと、後に大先生は嬉しげに語っていたそうです。

綾部に移ってからは、「神人合一の武道を作りなさい」という王仁三郎聖師の言葉に従うことになり、その後も 10 年余り惣角師には師弟の礼は尽くしますが、聖師との邂逅により求めるところがはっきりと違ってきたと思います。この時から求め始めたものが「大先生の合気（神人合一の武で神の愛気による武）」として結実します。

惣角師について、「観相に長じた出口王仁三郎師は、いちおう一道に達した人物とは見ながらも『数奇な運命の持ち主』では有るまいかと大先生にいい、なにやら『血の匂いがする』とて、人間的には余り好まなかったと聞いている。（略）出口師は、武田惣角師に対する大先生の態度が謙虚に過ぎるのを不思議がり、時には歯がゆがりもしたらしい」（『合気道開祖 植芝盛平伝』）ということから、王仁三郎聖師の手前、大先生が惣角師を避けるようになったのではないかとされていますが、既にこの頃から武道において求めるものが違ってきていたので、当然の帰結かと思っています。

大正 11 年(1922)の惣角一家の来訪について書かれている文章を読んでも、師弟の礼は尽くしていますが、喜んでお迎えして、少しでも「合気」を習得しようというニュアンスが伝わって来ません。

「(惣角師には住所も教えず綾部に移住し、第 1 次大本事件で取り壊された神殿や家屋の跡の整理に多忙な

毎日を送っていた。) そんなある日、北海道白滝に定住しているはずの武田惣角が、ヒョッコリ綾部に訪ねて来た。多忙な取り込み中ではあったが、しばらくの間でも柔術を教えてもらった先生であるから、盛平は師弟の礼をつくして粗末にはせずもてなした。どんな事情があったのか、盛平が惣角のために残して来た財産はどうなったのか、詳しくも話さなかったが惣角は、そのまま綾部の盛平のところに滞まることとなった。余程の事情があったらしい」(砂泊兼基著『合気道開祖 植芝盛平』)

井上方軒(鑑昭)先生も大先生が師弟の礼を尽くしたことを述べていますが、何故その必要があるのかと疑問を投げかけています。

「武田惣角先生には、貿易商の私の父と植芝の祖父が道場も作り、一生生活に困らんだけの現金を毎月送って居た。盛平叔父と武田先生がどういう約束をしたのか知りませんが、家土地迄差し上げて、何で叔父が武田先生に遠慮するのか、私は分からなかった」(『植芝盛平と合気道 I』 p.40)

礼ということに厳格であったか、女兄弟の中で育った所為で、大先生は、優柔不断と思われる程やさしい面を持っていたのではないのでしょうか。

記録上、大先生が師に礼を尽くし教授を受けるのは昭和 6 年(1931)4 月 7 日で最後になっていますが、昭和 11 年(1936)になって大阪朝日新聞社で惣角師に挨拶もなく立ち去った後、師弟の関係は徐々に途絶えます。このことで、大東流側からは惣角師に対する大先生の態度を詰る言葉もありますが、この時には第二次大本事件で王仁三郎聖師や大本の幹部が獄中にあり、その手前とても顔を合わせられるような状況ではなかったかと思えます。

『月刊 武道』2014 年 4 月号に、その時の状況が次のように掲載されています。

「昭和 7 年、久(琢磨)は東京から大阪朝日新聞社に庶務部長として転勤した。赴任直後、久は石井(光次郎)から、天才的な柔術家として植芝盛平を紹介され、警備責任者として、守衛を中心とした社員数名とともに、毎朝早朝、植芝の教授する柔術の修行につとめた。

4 年ほど経過した昭和 11 年 6 月 3 日(21 日という記載もあり)、大阪朝日の受付に、右手に鉄杖を突き、腰に鎧通し(短刀)をさした、小柄ではあるが眼光炯炯たる老人が現れ、植芝の師、武田惣角と名乗った上で『ここで植芝が大東流合気柔術を教えているが、彼はまだまだ未熟だ。真の大東流を学ばんと志すならば、自分の門人となって習え』という趣旨のことを述べた。

驚いた久がこのことを植芝に知らせにゆくと、『そうか』と言っただけで、出迎えにいかうもしなかった。当時、植芝は、技法に関する考えの違いから武田を避けていたらしいが、そのことを植芝・武田両師とも説明しようとしなかったもので、要領を得ないまま、久らは翌日から、早朝には従来のごとく梅田の村山邸内に設けられた道場で植芝の指導を受け、午後は武田を社内の宿直室に迎えて稽古をするという状態が何日間か続いた。だが、しばらくして植芝は内弟子を連れて大阪を離れた」

久氏が伝えている以上のことから推測すると、これより以前に師弟の関係は壊れていたようです。それで、惣角師が弟子(大先生)の教え先に突如現れ、前述のような口上になったと思います。それでも大先生は、諍いをせず、大阪朝日新聞社に大先生を紹介した人物である石井光次郎氏には連絡を取り、了解の上で、静かに大阪を離れたと思います。

この時、石井氏に了解を得るか事情を説明していなければ、後に石井氏が財団法人 合気会の理事になった

り、大先生の葬儀（当時、衆議院議長）で友人代表を務めたりするようなことはなかったと思う故です。石井氏は、この後、後輩に当たる久氏との交流も続けていますが、すっかり惣角師の言うことを信用し、惣角師に心酔している久氏にはその事情が伝えられなかったものと思われます。

歴史は、当事者それぞれの事実があると思いますが、この『月刊 武道』の文章から分かることは、大先生が惣角師と技法に関する考え方が違ってきていたことです。このことは、昭和 8 年(1933)に発刊された『武道練習』に「百事神と人との合気より言霊表現の誠を以て（註 神人合一して、神の愛の言霊の妙用を以て）」と書かれていて、「合気」の意味が大東流と違ってきていることから分かります。

この時点での惣角師の合気と大先生が表せる技術レベルとではまだ格段の差があったと思います。『月刊 武道』には続けて、「武田が最晩年に朝日新聞社で久らに教授した技法は、それ（伝書の内容）をさらに武田自身がより高度に発展させたもので、レベルの上では伝書の域をはるかに超えたものであったと思われる」と書かれています。一方、大先生の技が力を使わないものになったのは戦後のことです。

「私が稽古を付けていただいたが、あまりにも柔らかいので、私も稽古すれば戦前の翁先生のような力が出てくるのですかと尋ねました。翁先生は『戦前は解らず力で稽古していた。今は力は不要。此れが武産合気じゃ』と申された」（高岡貞雄談 <http://sighar.com/aiki/syumi04.html> より）

大先生が惣角師を離れるようになった経緯については、吉祥丸二代道主はもっと詳しく聞かれていたと思います。また、武田時宗氏は、大正 11 年(1922)に惣角師一家が綾部に滞在した時に 6 歳で、昭和 11 年(1936)には 20 歳ですので、もっと良くご存知であったと思います。

時宗氏は、「植芝さんは惣角の高弟でもあるし長く稽古もしていたので、私は上京の際は一番先に植芝さんのところに挨拶に行きました。植芝さんが亡くなってからは行きませんが、惣角も門人として植芝さんが一番可愛かったんじゃないですか。植芝さんが大阪で警察に捕まった時（一日だけだったが、早朝から深夜まで 12、3 時間の事情聴取を受けた時）も惣角は心配していました。佐川さん（佐川幸義）と私は、『様子を見てきてくれ』と惣角に言われて行ったのです。その時植芝さんは和歌山の田辺で謹慎していました。元気であるということで、帰って惣角に報告したところ、『それはよかった』と言っていました。惣角は植芝先生をしょっちゅう心配していました。彼を信頼していて何かあると植芝、植芝と言っていました。とにかく植芝さんはよく稽古していましたよ」（『武田惣角と大東流合気柔術』）と話されています。大人の対応をされての話だとは思いますが、これも事実だと思います。

私は、お二人の武道や合気についての考え方が違ってきた経緯については、大先生が王仁三郎聖師に出会い、求めるところが違ってきたため、やむを得ないことであったと思います。

この時点で、まだ、真の武（真の合気の道）を見出しておらず、獄死の仲間（幹部 30 名が検挙、16 名が獄死又は発狂）の報もあり、大先生も必死であったと思います。

ここまでで、大先生が求めた「合気」が、惣角師の合気とはほとんど正反対になった（根本的に異なる）ようだという事にだけ気付いていただければ幸いです。

## C. 大先生の合気

大東流の「相手を無力化する技術」「敵の力を無にする技術」（佐川幸義宗範による定義）という合気は素

晴らしいもので、確実に伝承されているようですが、古武道というベール（門外不出）に包まれていて熟達するための方法など核心の部分が部外者に公開されないため、諸説ある考えを特集した武道雑誌が売れているのではないかと思います。

その大東流の合気ほどには大先生の合気が何であるかが理解されていないために、Wikipedia「合気道」にある次のような「大東流の合気」も包含したような定義のまま混乱した状態に留まっているように思えます。

\*\*\*

#### 「合気」の歴史的考察

日本における武術用語としての「合気」は、江戸～明治・大正期の剣術書などに認められる。それらは彼我の技量や気迫などが拮抗し膠着状況に陥る、または先手を取られ相手の術中に嵌るといった、武術的には忌避すべき状態を差す言葉であった。しかし明治以降、「合気之術」など積極的な意味の使用例が現れる。この頃の「合気」には「読心術や気合の掛け声をもって相手の先を取る」といった意味付けがなされていた。大正期には各種武術書に同様の意味合いで「合気」の使用が見られ、「合気」が武術愛好家の間で静かなブームになっていたという。

大東流合気柔術では、相手の力に力で対抗せず、相手の“気”（攻撃の意志、タイミング、力のベクトルなどを含む）に自らの“気”を合わせ相手の攻撃を無力化させるような技法群やその原理を指す。なお大東流は初め「大東流柔術」と称していた。この名称に「合気」の文字が加わったことが確認できるのは、1922年（大正11年）、武田惣角が盛平に授与した目録が初めてである。

惣角は同年綾部の大本教団にいた盛平のもとを訪れている。この時に出口王仁三郎が「合気」を名乗るよう盛平に勧め、盛平は「合気」を大東流の名に加えることを惣角に進言、以後惣角もこれを容れて「大東流合気柔術」を名乗った、とする証言がある。

合気道においては上記の意味合いも踏まえ、そこから更に推し進めて「他者と争わず、自然や宇宙の法則（＝“気”）に和合することによって理想の境地を実現する」といった精神理念を含むものになった。（盛平は「合気とは愛なり」と語っている。）

大東流における「合気の技法」的なものから、合気道の体捌きである入身・転換、技に入るタイミング、相手に掴まれた部分を脱力して相手と一体化する感覚など、相手や自然の物理法則との調和・また宗教的な意味合いでの「宇宙の法則」と和合を図ろうとすることなど、技法から理念まで全てを広く「合気」と表現する傾向がある。

\*\*\*

このWikipediaに書かれているような意味であると理解して、稽古の中で工夫しようとするれば、「合気とは敵と闘い敵を破る術ではない。世界を和合させ人類を一家たらしめる道である。すなわち、合気道の極意は、おのれを宇宙の動きと調和させ、おのれを宇宙そのものと一致させることにある。修行者は、このことを日常の鍛練を通して悟るべきである」という大先生の言葉と併せて考えてみて、さて、鍛練と言われてもどうしたら良いものかと考え込んでしまうのではないのでしょうか。

相手を無力化しておきながら敵と闘い敵を破る術ではないと嘯（うそぶ）き、無力化することが理想の境地を実現しているのだなどと言えるのでしょうか。大先生の言葉は理念で、実際は違うというのならそれまでの話ですが…。

稽古の時に大先生が長々と話されたことで、当時の弟子は閉口したようですが、その話の中に大先生の合気が述べられています。

大先生が実際に話される時にはテープに録音されているように紀州弁ですが、道話や言志録としてまとめられているものは標準語になっているので、編集者がいて分かり易い標準語に直していると思います。その段階で間違いが生じたり本にする際に誤植があったりしたのでしょうか、一部分かりづらいところがあると思います。また、お話をされている段階では分かっている補足しなければ伝わらない部分もあるので、その点に注意しながら解きほぐしてみます。

大先生の合気は弓道の阿波研造範士などの説かれる極意の話とよく似ていますが、阿波範士ほど言葉の意味するところが難解ではありません。武道の真理（宇宙の真理）を宗教の真理を表す言葉を使って説明されているので、宗教の言葉が分かってくると理解し易くなると思います。幸い宗教の言葉は定義がはっきりしています。

ただし、言霊と同じで、一音多義的な表現があって、**Wikipedia** に書かれているように技法から理念までを広く表現されていますが、そのことを弁えれば、鍛錬法まで明らかにされています。

『合気神髄』と『武産合気』の中には次のような言葉が出てきます。数字はページを表しています。

| 合気に関連する言葉        | 合気神髄           | 武産合気 |
|------------------|----------------|------|
| 合気の起源            | 51（期限は間違い）、123 |      |
| 合気の稽古            | 62、161         |      |
| 合気の根源（合気の根元）     | 19             | 152  |
| 合気の根本の目的         |                | 111  |
| 合気の使命            | 73、150         | 140  |
| 合気の神髄            | 87             |      |
| 合気の魂の円           | 121            |      |
| 合気の鍛錬（武道の鍛錬）     | 42             | 18   |
| 合気の原理（合気の理）      | 36、38          | 192  |
| 合気妙応（合気妙用。合気の妙用） | 75、87          | 28   |

少し、「相手を無力化する技術」「敵の力を無にする技術」から離れて、フレッシュな目で道文を眺めてみて下さい。

大先生が、「それが 7 年前、真の合気の道を体得し、『よし、この合気をもって地上天国を作ろう』と思い立ったのです」（『合気道』p.200）と話されている体得時期は、私の推定ですが、昭和 25 年（1950）のことです。大阪朝日新聞社での教授を切り上げられてから 14 年経っています。

この間、昭和 13 年(1938)に『武道』を陸軍戸山学校長の賀陽宮（かやのみや）殿下のご要望によって作成され、「昭和 15 年(1940)の 12 月 14 日、朝方 2 時頃に、急に妙な状態になりまして、禊ぎからあがって、その折に今まで習っていたところの技は、全部忘れてしまいました。改めて先祖からの技をやらんならん（やらねばならぬ）ことになりました」（『合気神髄』pp.23-24）という体験をされ、続いて昭和 17 年(1942)に「武産合気の神示」が降ろされています（『合気道で悟る』p.42）。

「今まで習っていたところの技は、全部忘れてしまいました」と言われている言葉は、「今まで習っていたところの技の理合は、全部忘れてしまいました」という意味合いが強いと思います。それで「改めて先祖からの技をやらねばならぬことになりました」と言われる「先祖」、即ち日本の国の祖神、伊邪那岐・伊邪那美二神の島生み、神生みの技（業）、「ムスビ（産霊、結び）」が根本の理合となった「武産の技」へと変

わかります。このように理解すると、「合気道とは、宇宙の万世一系の理であります」（『武産合氣』p.28）と大先生が説明されるところが分かり易くなると思います。

ただ、大先生が「合気」という言葉で表現されていることを理解するには、いきなり理合からよりも合気道の技の方から眺めた方が分かり易いと思いますので、先に大先生の技の特徴から述べたいと思います。大先生の技は昭和 15 年(1940)に神示を受けられてから変わっていますので、道文として遺されている昭和 25 年(1950)頃から後の技と道文を比較すると良いと思います。

この昭和 25 年(1950)に入門された多田宏先生が大先生の技を受けた時の印象を次のように語られています。

「ある時期、私は不思議なことに気がついた。先生に近寄ったとたん、自分の心と体が何か透明な感じになる。そして先生に触れると、それはよりはっきりして、まるで自分と先生の心と体の境の区別が、無くなったような感じとなるのである。それは先生の修行で得られた、対峙を超えた心から生じる大きな気の力が、我々を包み込んだのであろう」（<http://www.asahi-net.or.jp/~yp7h-td/kaiso.html>）

大先生の最後の内弟子である菅沼守人先生も同じことを別の言葉で表現されています。

「大先生の技には無理が全く無いのですね。投げ飛ばされても気持ちよく受身が取れるのです。まるで吸い込まれる様な感じで。熟達していない人の技だと、変な風に痛かったり怪我をさせられることもありますが、そういうことが全く無く、本当に動きに無理がないのです」（『大先生の横顔』p.30）

山口清吾先生に師事された武田義信先生も同じ感じを受けられています。

「大先生は道場に現ただけで吸い込まれる感じでしたね。山口清吾先生も吸い込まれるんだけど、大先生は『同化する』という感じが強くて、“取る・取られる”の相対的な関係では無く、『一つに成ってしまう』感覚。言葉もね、根源の所、魂で話している感じでしたね」（『秘伝』2010 年 1 月号 p.59）

以上のような大先生の技の印象は、次の大先生の道文と良く一致しています。大先生は、そのような感覚（想念）で技を施されていたという考えでこの箇所を読むと良いと思います。

「人の目を見たり、相手の技を見たり、姿を眺めているんじゃないですよ。全部自分の腹中へ、身の内へ入れてしまうんですよ。自分の腹の中に在るんだから別に争う必要が無い。大宇宙が自分に在るという事や。全宇宙が自分の腹中に在る事や」（昭和 40 年頃のラジオ会見記『合気ニュース』142 号 p.15）

「合気道は相手が向かわない前に、こちらでその心を自己の自由にする。自己の中に吸収してしまう。つまり精神の引力の働きが進むのである。世界を一目に見るのである」（『合気神髄』p.15）

「合気道においては常に相手がなく、相手があっても、それは自分と一体になっていて、自在に動かせる相手なのです」（『合気道』p.201）

大先生が、「よし、この合気をもって地上天国を作ろう」（『合気道』p.200）と思い立たれた「合気」の技は以上のようなもので、「吸収」「一体」「同化」などがキーワードになろうかと思います。

他の武道でも同じ概念が述べられています。

「私のやり方を良く見ていましたか、仏陀が瞑想にふけっている絵にあるように、私が目をほとんど閉じ

ていたのを、あなたは見ましたか。私は的が次第にぼやけて見えるほど眼を閉じる。すると的は私のほうに近づいてくるように思われる。そうしてそれは私と一体になる。これは心を深く凝らさなければ達せられないことである。的が私と一体になるならば、それは私が仏陀と一体（註 神人合一）になれば、矢は有と非有の不動の中心に、従ってまた的の中心に在ることになる、矢が中心に在る、これを我々の目覚めた意識を持って解釈すれば、矢は中心から出て中心に入るのである、それ故あなたは的を狙わずに自分自身を狙いなさい、するとあなたはあなた自身と仏陀と的とを同時に射中（あ）てます」（弓道 阿波研造）

「厳に大義を重んじ包容同化の精神を培養し、たとえ敵対者に対しても日ごろ練磨した術技によって己を全うし、相手方の非を是正するところに真の武術の意義が生ずる。術技を通じ包容同化の精神如実に具現しえたとき、自他共に生存の実が生ずるので、真武の下に平和があり、平和の母体として武道が存すべき…」（鹿島神流 國井善弥）

いずれも弓禅一如、剣禅一如という言葉があって、「無念無想」や「無我無念」が説かれる武道です。

しかし、ここで忘れてならないのは、大先生の場合、普通の人が考えている無念無想（何も考えない）で一体化（同化）されたのではないということです。

皆さんは、ここの所を深く考えてみて下さい。「何故、無念無想ではないのか」とか「無念無想以外に一体化出来る方法があるのだろうか」ということを思い巡らせて下さい。

このようにお願いするのは、どんなに素晴らしい真理であっても、自分から見出さない限り身に付かず、進歩が望めないと思う故です。

「人は各々自分の流儀に従って考えねばならない。なぜなら、人は自分のやり方によって常に真理、あるいは一生を通じて役に立つ一種の真理を見出すのであるから」（ゲーテ）

大先生が体得された真の武は、しばしば武産合気という言葉で表現されています。

「同時に、『真の武の道は武農一如、武産（たけむす）合気の生命力生産の実践こそ原点である』とのかねてよりの信念にしたがって、2 年ほど前から決意して用意しつつあった茨城県岩間の里に、昭和 17 年（1942）、…さっさと… “神隠れ” してしまったのである」（『合気道開祖 植芝盛平伝』 pp.35-36）

この「武産」について、『武産合気』の p.14 に「神道の真理の言葉」という註が付されています。神道の真理とは、「ムスビによる神人合一の道が神道（神ながらの道）である」ということです。そうすると、武産とは、「ムスビ（産霊、結び）による神人合一の武道（神ながらの武道）」を表す言葉であるということが分かって来ます。

産霊は産（ムス）霊（ヒ）で、ムスビと訓（よ）み、生み出す力や生命力に満ち溢れたさま等を表す言葉で、結びの語源だそうです。

武産合気の神示にも「結び」という言葉が出ています。

「武産の武に精進するは魄（体）の為にあらず、この魂（心）の縁の結びなれば、よく肝に銘じて心得よ」（『合気道で悟る』 p.45）

ムスビは古代からあった言葉で、産す（生す）子、産す女（め）、即ち息子、娘という言葉にも含まれています。ムスブには、「結ぶ」以外にも「掬ぶ（むすぶ、掬する）」という言葉があり、気持ちを汲み取るという意味で使っていますが、「人間の体の中へ靈魂を入れ、結合させることである」（折口信夫による）という意味もあります。

「全部自分の腹中へ、身の内へ入れてしまうんですよ」と大先生が話されていることは、折口信夫（おりぐち しのだ）の説明のようなムスビの状態を言い表されているのではないかと思います。

さて、「一体」が後に付く四字熟語を探してみました。

「神人一体」「君臣一体」「三位一体」「夫婦一体」「親子一体」「人馬一体」「彼我一体」等々、別々のものが一つに結び合わされている状態を示す言葉が見つかりました。

「魂の縁の結び」や「皆、空に愛の氣を生じて一切を抱擁する。之、武産也」（『合氣道で悟る』p.43）という武産合気の神示の言葉に照らし合わせて考えると、この中では「夫婦」や「親子」を結び合わせているものが武産合気の結びの力になると思います。夫婦や親子が、お互いを思いやり気持ちを汲み取り合っていれば、愛が溢れる、結び付きの強い家族になってくるとと思いますが、その時に「無念無想」でそうになっている訳ではないことは明白だと思います。

如何でしょうか、「無念無想」以外に一体化する方法があるということについて、納得のいく説明になったでしょうか。

愛だけで、あるいは魂の結びだけで相手を投げられるとは思わないと考える人でも、自分を認めて受け入れてくれる親や職場の上司の前で素直になれる自分に気が付いていることと思います。愛の情動（万有愛護の大精神）には、相手を和と統一に結ぶ力があるようです。

「先生に近寄ったとたん、自分の心と体が何か透明な感じになる。そして先生に触れると、それはよりはっきりして、まるで自分と先生の心と体の境の区別が、無くなったような感じとなるのである」という多田宏先生が受けられた印象のとおりだと思います。

取り敢えず、そんなことがあるようだという程度の理解でも宜しいかと思います。

村上和雄先生（DNA 解明の世界的権威、筑波大学名誉教授）の言葉に、「脳は私たちが『できる』と思っていることしかできない。逆にいえば、『できない』と考えていることはできないのだ」というのがあります。人間の脳は、「そんなことはない」とか「そんなことはできるはずがない」と思っては、それ以上のことを考えなくなるのです。

「人間の能力、可能性は決して無限ではありません。遺伝子に書かれている以外のことは出来ないのです。ただ、人間の遺伝子で現在働いているといわれるのは 5%から、せいぜい 10%で、後はまったく眠ったままの状態に置かれています。つまり細胞の中の遺伝子は、A、T、C、G からなる 30 億の膨大な遺伝子情報を持ちながら、そのほとんどは OFF の状態にあるということです。したがってまずどのようなことでも可能性はある。無限と思ってもなんの差し支えありません。人間の可能性が無限であるという考え方は、私たちの脳が『可能と思ったこと』は可能だということです。世の中では奇跡が時々起きます。奇跡とは大半の人が『不可能』と思う事が『可能』になることです。しかし遺伝子的には奇跡もプログラムのうち。私たちは皆『奇跡の人』の可能性を持って生まれてきているのです」（村上和雄）

武産合気の結びは、体的な「触れる」とか「力を抜く」とかいう感覚的なものではないと思います。

「種を有しても（種を蒔いても）大地が愛をすってうけてくれねば結び生ぜぬ。故に、初（はじめ）の兆しの愛の氣（ス声）に結びて武産の愛の氣を以て業を生め。一時のからくりでなく（小手先の感覚的な技

術でなく)、神業の神力が生じてくる」(武産合気の神示、『合氣道で悟る』p.43)

「無念無想」は年期がいますが、「愛の情動」であれば、柳生新陰流の柳生延春宗家がおっしゃる、相手と対峙した時に「さあ、いらっしゃい(ス声と同じ愛の言霊)」という気持ちになるところから入っても良いかと思います。

「今迄の武道は、長い年期を入れないと自分になれなかったのですが、私はすぐにも了解し得る道を開いたのであります。…生通しの生命を腹中に胎蔵し、宇宙も悉く腹中に胎蔵して、自分が宇宙となるのであります」(『武産合氣』p.70)

指導員には、「知っていることはすべて教えましょう」とお願いしています。誰も出来ること、知っていることしか教えられませんが、技は盗むものであると考えて教えなかったり、自分が体得したものが最高であると思って、それを他人に教えるのはまずいと考えていたら向上は望めません。すべてを教えながら自分も稽古させて頂いていると考ええると、教える者も教えられる者も互いに啓発されて、更にその奥が分かって来ると思う故です。

また、教えられる側の会員には、「私には出来ない」とか「師範が教えているのは上級者向けで、私のレベルでは一、二、三、四と順に足運びはこうで、手捌きはああでというように覚えなければならない」という狭い観念を持たないようにお奨めしています。

指導員は、持っている最高のレベルをお伝えしようとしていますが、たとえ「一、二、三、四」という稽古であっても、合気道では、最初から極意(武産合気の神示:武の極意は形はない、心自在に生ず)の稽古をしていると思って取り組んで下さい。

合気道の技の方から眺めるということなので、そのような稽古をして、皆が大先生の伝えようとされたところが悟れるようになりたいと願っています。

大先生は、「斯く打込んで来る敵に向かって、いつも自分の心に敵を包むやうな雄大な気持ちで対すれば、敵の動作を見抜く事が出来る。其の処で、それに合して右、或いは左に体をかはす事も出来る。又敵を自分の心に抱き込んだら、自分が天地より受けた処の道に敵を導く事が出来る」(『武道練習』)と教えられています。この文章は昭和8年(1933)のもので、大正14年(1925)の黄金体と化す体験を踏まえて一段と工夫が進まれていることと思います。そして、神示を受けられた時にはどの方向を目指せば良いかがはっきりとされていたのではないのでしょうか。

「眞の武は武産の意義を明(あきらか)にするにあり」(武産合気の神示、『合氣道で悟る』p.44)

「稽古をば疑ふほどに工夫せよ 解きたるあとが悟りなりけり」(二刀流兵法問答)

それでは、『合気神髄』と『武産合氣』の中の合気に関連する言葉を順に拾い上げて、大先生の合気に対する理解を深めて行きましょう。

大先生の言葉は用語の定義が確かなので、自分の言葉でそれぞれの項目ごとに「合気の〇〇とは、つまり…である」というように概念化すると理解し易くなると思います。

## 1) 合気の起源

神示に「武産の武を、法座(人間の理性では解決できないような問題があれば、それを担当する神々に降臨を願い、その方法や教示を得るために行う修法)を以って使命付けられてゐるものは、汝一人以外に過去現在にない。この有難い使命を、精神を以って達成する様、努力を以って貫け」(『合氣道で悟る』p.34、

43)とあります。この神示にある「精神」は「心を込めて」という意味ではなく「万有愛護の大精神」ということです。

「この至仁至愛の一大気の運化をもって合気の起源となす。ゆえに至仁至愛、万有愛護の大精神をもって合気とは名づくるものなり」(『合気神髄』 pp.51-52)

「至仁至愛の一大気の運化は、また合気の起源であります」(『合気神髄』 p.123)

多田宏先生の言葉の「対峙を超えた心から生じる大きな気の力」を「至仁至愛の一大気の力」「至仁至愛、万有愛護の大精神の力」に換えれば分かると思いますが、これが「過去現在（の武道界）にない」ところです。そして、これが大先生の合気の起源です。

「自己の愛の念力（念彼観音力）をもって相手を全部からみむすぶ」(『武産合気』 p.128) 愛の働き（運化）が大先生の合気の起源（本）です。

「合気とは愛の力の本にして 愛はますます栄えゆくべし」という有名な道歌は、「合気とは愛が力の本にして 愛はますます栄えゆくべし」と読み替えると、「合気の起源」を詠ったものであることが分かります。

## 2) 合気の使命

「武とはすべての生成化育を守る愛である。でなければ合気道は真の武にはならぬ。…合気道の修行に志す人々は、心の眼を開いて合気によって神の至誠を実際に行うことである。…人を直すことではない。自己の心を直すことである。これが合気なのである。それはまた合気の使命であり、自己自身の使命でなければならぬ」(『合気神髄』 pp.150-151)

「万有愛護の使命の達成を除いて、合気の使命は他にはありません」(『武産合気』 p.140)

「(スの) 大神の御心（みこころ：愛）にかなう御経綸の武を生むのが合気の使命であります」(『合気神髄』 p.73)

「正勝吾勝 御親心（みおやごころ）に合気して すくい活かすはおのが身魂ぞ」

吉祥丸二代道主が、「自己の人格形成を目指す求道でなければならぬ」とされた合気道で求める（数ある要素からなる）人格の第一は「万有愛護の心」を指しているようです。人が兼ね備えるべき智仁勇の三徳は「仁」を中心にということになります。

「愛」という言葉は日本語になりきっていないようです。“God is love”の“love”という英語も限定的な意味で使っているのではないのでしょうか（Godを「神」ではなく、「救い主」「贖い主」と訳すと分かり易くなるでしょうか）。

マザー・テレサは、「愛の反対は憎しみではなく無関心です」と言っているのです。関心を持つことが愛の行いになりますが、「すべての生成化育を守る愛」ということは関心を持って、即ち愛の情動を以て「育む」「慈しみ育てる（導く）」というような意味になるのでしょうか。合気道の技であれば、相手を型に嵌めて制しようと思わず、行きたい所に行かせるという無抵抗の技になると思います。

そのような技であれば、相手は心地よいと感じることでしょう。

## 3) 合気の根本の目的

「ただ強ければよい、負けなければよい、と力と力で争い、弱いもの小さいものをあなどり、それを乗り取ろうとする侵略主義になろうとしている、その魔を切り払い、地上天国建設精神にご奉公をするのが、

合気の根本の目的なのであります」(『武産合氣』 p.111)

相手も自分も心地よい稽古をすれば、その場がそのまま地上天国となり、道場を離れても隠すことのできない人格となって現われ、好感を持たれるようになることでしょう。

#### 4) 合気の根源（合気の根元）

「伊邪那岐、伊邪那美の造化の結びの神の化身の現れである。無性（むしょう、魂、祭）と有性（うしょう、魄、政）の大原則（魂魄や祭政一致の結び）ことごとく宇宙の営みの元を生み出した。それが合気の根元となる。つまり、古典の古事記の実行が合気である」(『合気神髄』 p.19)

「この（草薙の神）剣こそ祭政一致の根源であって、武の現れである。合気の根源である」(『武産合氣』 p.152)

この合気の根源は、「神人合一の結び」「祭（魂）政（魄）一致」「魂魄和合（後述の「合気の魂の円」の項参照）」ということのようです。「大東流の合気、合気道の合気」と言っている人の「合気道の合気」の元（根元）になっている概念、理合です。

#### 5) 合気の原理（合気の理）

「植芝先生は、じゅんじゅんと私達に合気の原理を説明して下さる。『…真の武道には相手もない、敵もない。真の武道とは、宇宙そのものと一つになることなのです。宇宙の中心に帰一する（註 自己の中心に吸収してしまう）ことなのです。…』」(『武産合氣』 p.192)

「全人類を大きく和合包摂し、総合渾一化して神人一体（合気の理）を傷つけないようにするところに、宇宙や万物の無限の発展完成が約束されている」(『合気神髄』 p.36)

「合気道を修行する者は、また万有万神の条理を武道に還元さすことが大切なこととなってくるのである。それは万有万神の条理から来る真象を眺めることである。真象を通して合気道の技は、合気の原理（註 真象、結びによる神人一体、宇宙組織の魂のひびきを神習うての無限の力）を通して創造することが可能であるから、どんな微妙なる宇宙の変化にも、よく注意していなければならない」(『合気神髄』 p.38)

「神人一体」「神人合一の結び」「宇宙そのものと一つになる」が合気の原理（理合）であるとのこと。

#### 6) 合気妙応（合気妙用。合気の妙用）

「合気道とは、天授の真理にして、武産（たけむす）の合気の妙用であります」(『武産合氣』 p.28)

「技は、すべて宇宙の法則（天授の真理）に合していなければならないが、宇宙の法則に合していない技は、すべて身を滅ぼすのである。このような技は宇宙に結ぶことはできない。…宇宙に結ばれる技は、人を横に結ぶ愛の恵みの武ともなる。宇宙と結ばれる武を武産の武というのである。武産の武の結びの第一歩はひびきである。五体のひびき（註 波動、呼吸）の槍を阿吽（あうん、呼吸）の力によって、宇宙に広げるのである。五体のひびきの形に表れるのが『産（むす）び』である。…呼吸の凝結が、心身に漲（みなぎ）ると、己が意識的にせずとも、自然に呼吸が宇宙に同化し、丸く宇宙に広がっていくのが感じられる。その次には一度広がった呼吸が、再び自己に集まってくるのを感じず。このような呼吸ができるようになると、精神の实在が己の周囲に集結して、列座するように覚える。これ即ち合気妙応の初歩の導きである。合気を無意識に導き出すには、この妙応が必要である」(『合気神髄』 pp.86-87)

「次に自分の発声するのは発声と同時に宇内（うだい）の魂線にふれて、自己、発声せずとも、大いなる宇内は三音（註 ア・ウ・オの言霊、『合気神髄』 p.111 参照）を化して、丸く外部に広がっていくのを覚

えます。その次には一度言霊（ことだま）の発声するに従い、宇内（うだい）は自分に集まって来るのを覚えます。以上のごとき精神実在が明るく自分の周囲に、すべての霊が集結して列座するように覚えます。これすなわち、合気妙応の初歩の導きと存じます」（『合気神髄』 pp.74-75）

「即ち人としてつとめをするにも、息を出す折には丸く息をはき、ひく折には四角になる。そして宇宙の妙精を身中にめぐらし六根を浄め働かすのです。丸くはくことは丁度水の形をし、四角は火の形を示すのであります。丸は天の呼吸を示し、四角は地の呼吸を示すのである。つまり天の気（愛）によって天の呼吸と地の呼吸を合わせて技を生み出す」（『武産合気』 p.45）

精神の実在（霊）が己の周囲に集結して列座するように覚えることが合気妙応の初歩の導きであると言われています。丸く息を吐き、四角く息を吸うこと（**註** 逆腹式呼吸による観想法）により、宇宙と一体になる（結ばれる）ことを表しているようです。

大先生の「天の呼吸、地の呼吸」は、山口志道著『水穂伝（みずほのつたえ）』の附言にある「天地は水火（いきく息く、しほ、く塩く）の凝（こり、凝結）なり。故に日月の運行（めぐる）は天の呼吸なり。汐の満干は地の呼吸なり」と同じ概念です。

「それで天の呼吸（日月の息）、地の呼吸（潮の満干）を腹中に胎蔵する」（『武産合気』 p.134）という道文も、宇宙と一体になることの説明です。

この合気の妙応（妙用）が次の「合気の神髄」に繋がります。

## 7) 合気の神髄

「こうして合気妙用の導きに達すると、御造化の御徳を得、呼吸が右に螺旋（らせん）して舞い昇り、左に螺旋して舞い降り、水火（**註** 魂魄）の結びを生ずる。摩擦連行作用を生ずる。水火の結びは、宇宙万有一切の様相根元をなすものであって、無量無辺である。この摩擦連行作用を生じさせることが、できてこそ、合気の神髄を把握することができるのである」（『合気神髄』 p.87）

「合気道は宇宙万世一系の理道であって、一元の元津御親神即ち宇宙の“す”のみ声生れる前、大虚空を作り、その営みより我国の古き神代よりの歴史を生命として、又この歴史を修行の根元として、まつりぎ（**註** 真釣木、真鈎木。まつりぎは誤り。魂魄一体、水火の結びで、バランスが取れていること）の意義をあらわし、かつその実行実在の上に、天の運化により修行する方法が私の合気道であります。これを真の武術と心得まして、この一元より出てくる宇宙の営みのみ姿、水火のむすびつまり天の呼吸（日月の運行）と地の呼吸（潮の満干）とを合し、一つの息として生み出してゆくのを武産合気というのであります。それはどういうことかをいうかという『す』と『う』の働きによって、自分というものは、この与えられた魂と肉体（魄）との不離一体の交流によって、腹の底から『あ、お、う、え、い』を身体の口より鳴り出さしめるところの形式と、水（魄）と火（魂）との動き、つまり高御産巢日（霊系）、神産巢日（体系）の二神の、右に螺旋（らせん）して舞い昇りたまひ、左に螺旋して舞い降りたまふ御行為によって、水精火台の生じる摩擦作用の模様と全く同一形式なのであります」（『武産合気』 pp.43-44）

摩擦連行作用（摩擦作用）は、連行という言葉から分かるように、受けが吸い込まれるような感じを受ける作用のことです。

私は、これが無念無想、精神統一というような意味での心身統一の力ではないと考えていますが、皆さんの理解は如何でしょうか。「御造化の御徳」は「愛の情動、人を横に結ぶ愛の恵み」ですから、愛の情動が十分に働いているものです。大先生が霊体統一と表現されるときには、霊（愛の情動）主体従ですので、

そのような観点から後述の「合気の魂の円」や「合気の稽古」「合気の鍛錬」を理解すると良いと思います。

「水火のむすびつまり天の呼吸と地の呼吸とを合し、一つの息として生み出してゆく」という言葉は、「呼吸力」という言葉の元になっているものだと思います。山口志道は、「水火」と書いて「イキ」と読ませていますので、「呼吸力」は「イキ（水火）の力」であって、「気（火）の力」だけではなく、「水（魄）と火（魂）の結びの力」を表した言葉であると思います。

山口志道は、日月の運行（天の呼吸）が海水に働いて潮の満干を引き起こす現象からヒントを得て、天の呼吸、地の呼吸の概念を得たと思われます。大先生が、この概念を引き継いでおられれば、潮汐力のように作用する力が呼吸力で、受けが吸い込まれるような感じを受ける作用を及ぼす力ということになります。

この結びの力が、大先生の合気の神髄です。

「いづとみづ十（あいき）と生りし黄金橋 富士と鳴門の仕組なるかな」（昭和 35 年(1960)日本テレビ制作の映画『合気道の王座』）

黄金橋が天の浮橋（水精火台）、富士（火）が中心（天之御中主神）、鳴門（水）が右旋左旋（高御産巢日神、神産巢日神）で、水（瑞、魄）火（巖、魂）の結び（十、合気）の力を詠んだ道歌です。

## 8) 合気の魂の円（えん）

「円の働きのめぐり合わせが、合気の技であります。技の動きが五体に感応して、おさまるのが魂の円（原文は円の魂）であります。

円は皆空（みなくう）で、皆空の中から生み出すのが心であります。皆空とは自由自在のことです。皆空に中心が生ずるとき気を生み出します。皆空の中心より無量無限の宇宙に気結び、生結びするのが魂であります。魂は一切を生み出すものであり、不滅の生み親であります。

円を五体の魄（原文は魂）におさめると、技を生み出す仕組みの要素を生じます。産むは無限であります。すべてを豊かに満ちたる仕組みになすのが円の現われであります。

円は宇宙にある一切の万物生物を、気結び、生産（いくむす）びの形にて、生成化育し、守護の仕組みを生じさせます。世の中の因縁も円（まる）い動きのめぐり合わせであります。合気の武も円いのであります。

また、合気をもって物（魄）と心（魂）を合わせ、生き栄えていく仕組みをもつのが魂の円であります。宇宙の気はすべて魂の円におさまります。おさまるがゆえに技も無限に包蔵され、生み出すこともできます。これが合気の魂の円であります。

この魂の円がなければ栄え、また精進、魂魄和合のはこびはできません。これがなければすべて五体への還元はなくなるのであります。魂の円（原文は円の魂）の皆空は宇宙一体に帰します。

これは合気の武の根源（註 合気の根源の項 参照）であります。が、魂の円を体得した極意には、相対の因縁動作を円に抱擁し、掌に握るごとく、すべてを吸収します。己に魂があれば、人にも魂があり（それ故、同調する）、これを気結び、生産びして円の本義の合気を生み出させれば、円はすべてを統合します。いかなるものも自由にとけるのが円であります。

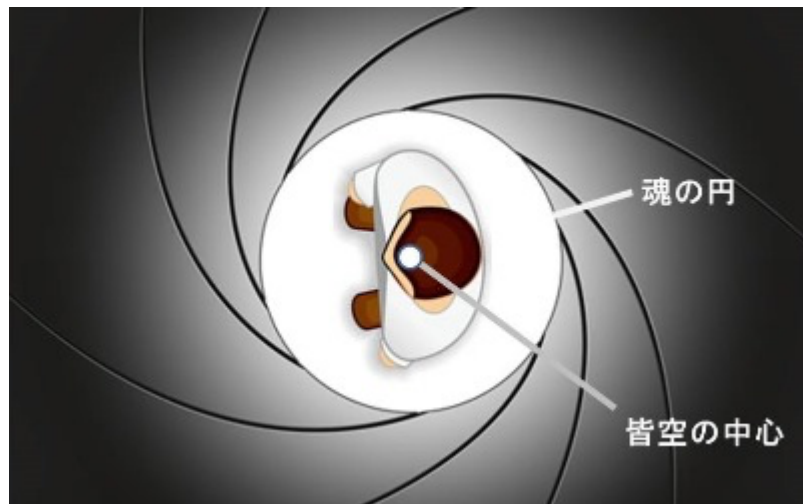
円の極意は皆空の中心をつき、技を生み出すことにあります」（『合気神髄』 pp.120-121）

この「魂の円」は解説が必要かと思います。

これは合気道新聞第 4 号（昭和 34 年 7 月 10 日）の道文「圓（円）の本義」に載っているもので、第 3 号の空の気と真空の気の結びの説明に続くものです。「合気の原理」「合気の神髄」とも関連していて、大先

生が体得された真の合気の道の根幹をなす部分だと思います。

道文には「魂の円」と「円の魂」という言葉が混在していますが、「魂の円」が正しいと思います。『靈界物語』にはなく、大先生の造語の故に用語の混乱が生じたのではないのでしょうか。肉体（魄、五体）に重なった気の身体を「魂」として、この気の身体を天から（上から）見ると、中心を臍下丹田、又は正中線とした円形になっていると意識されるのと、この気の身体が螺旋に廻るので「魂の円」と表現されたのだと思います。



まず、合気道新聞第3号（昭和34年6月10日「創造の武」、『合気神髄』pp.66-68「空の気を解脱して真空の気に結ぶ」）から関連のある言葉を抜粋します。

五体：「武は人のなす技に、喰い込み、喰い合せ、喰い止まって、その動きと働きに仕組んであります。これは五体（魄）の働きであります」

中心：「また、武は技（魄）と光（魂）を結ぶ事に力を入れなければなりません。その結びは中心がなければなりません。中心があるから動きが行われるであります。この中心は腹であります」

ここで、「皆空（みなくう）」ですが、般若心経にある「五蘊皆空」の「皆空（かいくう）」と同じ意味で、「知覚できる実体のない空（まったく何も無いのではなくて、何かを入れるスペースがあること）である」と理解して宜しいかと思います（<http://www.mikkyo21f.gr.jp/academy/cat48/post-202.html> 参照）。

万有愛護の気持ちで立って、気の身体（魂の円）を皆空と感ずることによって、相手が自分を打とうとする気がスーッと中心にまで入って来てくれると思います。「宇宙の気はすべて魂の円におさまります」や「円はすべてを統合します。いかなるものも自由にとけるのが円であります」という説明もそうですが、次の説明も同じことを言い表されています。

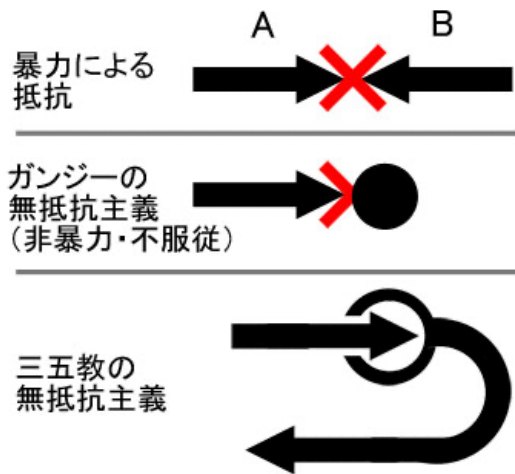
「合気道は相手が向かわない前に、こちらでその心を自己の自由にする。自己の中に吸収してしまう。つまり精神の引力の働きが進むのである。世界を一目に見るのである」（『合気神髄』p.15）

「皆空とは正しき身魂の和合統一の事なり」（『合気神髄』p.53）ですから、「合気道においては常に相手がなく、相手があっても、それは自分と一体になっていて、自在に動かせる相手なのです」（昭和32年刊『合気道』p.201）となり、「皆空とは自由自在のことであります」という謂いになります。

「魂の円（註 原文は円の魂）の皆空は宇宙一体に帰します（宇宙と一体になります）」とあることから、皆空の中心は宇宙の中心と一つになる、即ち「我は即ち宇宙」の状態になった時の我の臍下丹田（腹）であると分かりますが、皆空ということですから、空（から）にした己の腹中（中心）まで相手が入って来

るのを妨げないことかと思ひます。

大本教の教えの無抵抗主義を表す次の図が良く出来ていて、相手を中心まで迎え入れているのが分かります ([http://onido.onisavulo.jp/img/rm\\_blog/muteikousyugi.jpg](http://onido.onisavulo.jp/img/rm_blog/muteikousyugi.jpg))。



武産合気の神示に「皆、空に愛の氣を生じて一切を抱擁する。之、武産也」(『合氣道で悟る』 p.43) とあるとおり、無抵抗主義になると「(相手と自分という) 相対の因縁動作を円に抱擁し、掌に握るごとく、すべてを吸収します」で、相手の体の大小に関わらず自分の腹の中心に入って来てしまうのが不思議です。

「円の極意は皆空の中心をつき、技を生み出すことにあります」は、「合氣道においては常に相手がなく、相手があっても、それは自分と一体になっていて、自在に動かせる相手なのです」(昭和 32 年刊『合氣道』 p.201) と同じことを表現されていることが理解できるでしょうか。

吉祥丸二代道主が、「円転の理」として取り上げられた理は、この「魂の円」も意識されてのことかと思ひます。

「この動きは、合氣道のいわゆる“押さば廻れ、引かば廻りつつ入れ”ということであって、常に自己が中心となった円転の理の活用である」(昭和 32 年刊『合氣道』 p.36)

大先生よりも二代道主の動作を主体にした解説が分かり易いかもしれませんが、触れて制する合氣道から吸収する合氣道に持つて行くには大先生の説明のとおり心働きを理解するのが王道かと思ひます。

この魂の円を詠んだと思われる道歌があります。

「あかき血に仕組む言靈此妙技 もちろん○を出だしてぞ生む」

「六合(りくごう、宇宙)の 内限りなくぞかきめぐり きよめの道は○ともちに」

「もちろん」は「△○□」という合氣道の体の動きを表す言葉で、大先生は「物の靈(魄、体)」と仰られています。現道主が、「入身と転換の捌き」とご指導されている体捌きであると理解するのが良いと思ひます。そうすると「○」は△○□(もちろん)の一つではなく、魄と一体になった魂を表すものはずで、「魂の円」のことだと推察できます。

これらの道歌は戦後になって作られたもので、大先生が見出された真の武を詠われたものです。

「念を去って皆空の氣にかえれば生滅を超越した皆空の御中心に立ちます(註 天の浮橋に立つこと)。これが『武道の奥義』であります」(『合氣神髓』 p.80)

## 9) 合気の稽古

「合気の稽古はその主となるものは、気形の稽古と鍛錬法である。気形の真に大なるものが真剣勝負である。武道においては本来、いわゆるスポーツ的試合はない。試合うとすれば生死をかけた試合となる」(『合気神髄』 p.161)

「気形」は「きがた」と読みます。「気形の稽古」は「気の型稽古」ではありません。「気形」は英語ではそのまま“energy shape”や“energetic form”と訳され、“fluent attacks, tori (取り) will not allow to be grappled” (<http://sanshinkai.eu/glossary/>) という定義がなされています。『合気道—剣・杖・体術の理合』(齊藤守弘著) に述べられているところの気体技法の稽古になるかと思います。「相手の手、足に触れない……。気を導き、同化和合することを省略するものではなく、流体技法(気の流れの稽古)の極みが真の気体技法である。この技法は嘗て大先生が見せて呉れた技法である」(同書 第五巻 p.36) という説明がなされています。前掲の道文は『合気道講習会用テキスト』(<https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/1996/00224/contents/023.htm>) にも載っており、また、「それから星哲臣に稽古をつけた時のことである。彼は柔道より出た者であるが、気形として前進法を教えている時、急に背負い投げを掛けて来たのである」(『合気神髄』 p.162) と続いている文章からも、大先生の稽古でよく見せられた技法(稽古法)であったと思います。

YouTube で「気形」「kigata」で検索すると次のようなものがありました。

[https://www.youtube.com/watch?v=S6\\_pEJGfJqY&spfreload=10](https://www.youtube.com/watch?v=S6_pEJGfJqY&spfreload=10)

都城合気道錬成会 H23 冬季おさらい演武会 気形・気結びの舞の解説

<https://www.youtube.com/watch?v=asVmUhh6Xxw>

Katate Ryotetori - kotegaeshi (Kigata)

<https://www.youtube.com/watch?v=0hPZ8iJwh5g>

Kotegaeshi. Katate Ryotetori. Kigata

<https://www.youtube.com/watch?v=huis5oZ2Lc8>

Kiriotoshi. Katate Ryotetori. Kigata

大先生の演武や稽古では、次の動画の 6:17 以降にあるのと同じような技法(気形の稽古、気体技法)が多見されると思います。

<https://www.youtube.com/watch?v=PaKHSjPlpys>

「気形の真に大なるものが真剣勝負である」と述べられていますが、この真剣勝負はガチンコとかフルコンタクトとかいう意味での実戦勝負を指しているわけではありません。文字どおり生死を分ける真剣勝負では、常に勝つ(死なない)という絶対不敗が求められる故、自己を宇宙の中心に帰一して無敵(敵、即ち相手がない無抵抗主義)になるための気形の稽古が欠かせないのだと思います(真剣勝負の話の後に「先生はいつも勝ってばかりいられたのですか」という質問があるので、大先生のお話を聞いていた人は絶対不敗のお話をされていると理解していた。『合気神髄』 p.162 参照)。

そのような稽古をしようとする時のヒント(道文)があります。

「合気道は相手が向かわない前に、こちらでその心を自己の自由にする、自己の中に吸収してしまう。つまり精神の引力の働きが進むのです」(『合気道技法』 pp.262-263)

「私は宇宙と一つ、私は何物もない。立てば相手は吸収されてしまう。植芝の合気道には時間も空間もない。宇宙(往古来今謂之宙、四方上下謂之宇。宙：時間、宇：空間)そのままがあるだけなのだ。これを

勝速日といいます」(同書 pp.260-261)

「植芝の合気道には敵がないのだ。相手があり敵があつて、それより強くなりそれを倒すのが武道であると思つたらそれは間違いです。真の武道には相手もない。敵もない。真の武道とは宇宙そのものと一つになることだ、宇宙の中心に帰一することです。合気道では強くなろう、相手を倒してやろうと錬磨するのではなく、世界人類の平和のため、少しでもお役に立とうと、自己を宇宙の中心に帰一すること、帰一しようとする心が必要になるのです」(同書 p.261)

気形ですが、『霊界物語』に「気形透明」「気形透明体」という言葉があり、そこでは「きけい」と読んでいます。「透明な気体の状態」というような意味でしょうか。気形(きがた)の稽古の気形は、この気形(きけい)という意味と連なります。

「出雲国は何処諸(いづくも)の国と云ふ意義で、地球上一切の国土である。肥河上(ひのかわかみ)は、万世一系の皇統を保ちて、幽顕一致、神徳無窮にして皇朝の光り晴れ渡り、弘(ひろま)り、極まり、気形透明にして天体地体を霊的に保有し、支障なく神人充満し、以て協心戮力(きょうしんりくりょく)し、完全無欠の神政を樹立する至聖至嚴至美至清の日本国といふ事なり」(『霊界物語』15-2-11)

「至大浩々漂々恒々として撒霧(さんむ)たる◎(ス)の時において、その機約の両極端に対照力を起して、恒々湛々たるが故に、その至大の両極端に対照力を保ちて、至大悉く両々相對照してその機威の中間を極微点(こごこ)の連珠絲(さぬき)がかけ繋ぎ、比々(ならびならび)隣々(となりて)ヒシト充実極まり居る也。しかれども気形透明体なるが故に人の眼には見えざるなり。見えねどもこの連珠絲が靈氣を保ちて初めて至大天球(たかあまはら)を造る時に、対照力を以て至大の外を全く張り詰りて球となりし也」(同書 81-0-1)

この気形の稽古については、「みだりに(補足 目に見える外の形だけを)真似ることは差し控えるべきであり、又、真似しても何の得にもならない筈である。ここまで練り上げるのが真の稽古であると思う。大先生は『わしは60年間固い稽古を続けてきたから、今日のわしが在るのじゃ』と、気体技法を行った後に我々に語っておられた事をお伝えしておく」(『合気道—剣・杖・体術の理合』第五巻 p.36)と戒められています。

しかし、固体(基本)技法と気体技法がまったく違ったものであると思わないで、ある程度の型を覚えたら、気形の稽古とは何かという工夫を重ねるのが良いと私は思います。無抵抗主義ですから、無理矢理に自分の腹中(中心)まで相手を引き込まなくても相手が入って来てくれるのを迎え入れるという心(自己を宇宙の中心に帰一すること、帰一しようとする心・意識)の鍛錬は早くから取入れて、自分のものになるよう練り上げるのが良いと思います。

「過ぎし年、入門した或る武道家が道主(大先生)に向い、『私は過去六ヵ月先生について教えを頂いたが、残念なことにまだ極意の技を教えて頂かない。先生、極意技とは如何なるものか形だけでも見せて頂けないでしょうか』と言ったことがある。道主は呵々と笑いながら、『君は何を言っているのか。日々極意の技をやっているではないか。今日教えた入身の投げ技などは、極意中の極意だ。奇想天外な極意などというものは、武道に於てはあり得ないよ』と言ったことがある」(昭和32年刊『合気道』pp.129-130)

大先生は、この極意の部分の技で示されるのと同時に、長々とした難しいお話の中で説かれていると思います。皆さんは、ここまでの「大先生の合気」にまとめたことを参考にし、日々の稽古の中で極意(理合)の技を意識し工夫して行きましょう。稽古相手から「吸い込まれるように感じる」という言葉が聞けるよ

うになると、進展していることが分かります。

「天地の呼吸に合し、声と心と拍子が一致して言霊（ことだま、ス声と理解すべきか）となり、一つの技となって飛び出すことが肝要で、これをさらに肉体と統一する。声と肉体と心の統一が出来てはじめて技が成り立つのである。霊体の統一ができて偉大な力を、なおさらに練り固め磨きあげていくのが合気の稽古である。かくしてゆくと、世の中の武道の大気魂が、その稽古の場所、および心身に及んで、練れば練るほど、武の気魂が集まって、大きな武道の太柱ができる。柳生十兵衛も塚原ト伝も、あらゆる古今の達人、名人の魂が全部集まり、また武道の気も神のめぐりによって全部集まりくるの理を知り、稽古に精魂をつくすべし」（『合気神髄』 p.62、『武道練習』 p.15 が原典）

合気道の理念や理合を行動レベルまで落とし込んだものが合気の稽古になります。大変重要かと思うので、稽古の実効を上げるために（実効性を高めるためではありません）もう少し踏み込んで稽古法について考えてみましょう。

「三元とは剛柔流でその働きは又三つの働きとなる。即ち生産霊（いくむすび） 足産霊（たるむすび） 玉留産霊（たまつめむすび）の働きである。気を起こして流体素、あらゆる動物の本性である。柔とは柔体素で、植物の本性又肉体のように柔らかいものである。剛とは剛体素、大地や岩石のような固い物、鉱物の本性である。これらの上であって、気によって活動している。気にも悉く剛柔流の働きがある。そして動いている」（『武産合気』 p.161）

この道文を齊藤守弘先生の固体技法、柔体技法、流体技法、気体技法に結び付けると、順に剛、柔、流、そして気の技法、働きになると思います。

『合気道一剣・杖・体術の理合』第五巻の p.35 辺りから引用します。

- ・剛 「固体（基本）技法の体捌きは、双方が静止した状態から技を始める方法である。この静止した状態は、相手に数歩ゆずって片手、両手、肩、胸など完全に取らせた最悪の状態である。この状態から無理なく自分から動いて相手を導き、制する訳である。・・・固体技法の体捌きは、自ら一歩側面に入って導くことが大事である」
- ・柔 「柔体技法の体捌きは、例えば片手取りであれば、相手が手首をしっかりと握った時には既に体捌きが始まっているというように、“流れ”の技法と固体技法との中間的な捌き方である」
- ・流（気） 「流（気）体技法の体捌きは体を捌いて相手の気を流し、その流れに同化（同調）する捌き方である」

「気を起こして流体素」ですから、流体技法は、別名「気の流れの稽古法」と理解して良いでしょう。

そして、気体技法は「気形の稽古法」、「（相手を腹中に吸収して一体となる）気結びの稽古法」又は「引力の錬磨の稽古法」として、区別して理解したいと思います。武産合気の神示の「皆、空に愛の氣を生じて一切を抱擁する。之、武産なり」や「武産の武は、形より心を以て、本とし、之の魂のひれぶり、武としての活躍なれば、之（スの）大神の愛の氣結びである」と照らし合わせると、「武産合気の稽古法」と呼んでも良いかと思います。

体捌きで説明されていますので、いわゆる「楷書、行書、草書」と考えることも出来るでしょうが、「気にも悉く剛柔流の働きがある」ですから、これらを気の側面から眺めてみましょう。しかし、一言で「気」

という意味が曖昧になるので、稽古に取り入れやすい意識という面で捉え、物理学、力学的な法則も当てはめてアプローチしたいと思います。

どんなに気といっても、固体技法や柔体技法では接触点があるので、接触点を動かせば  $F=ma$ （力  $F$  は、質量  $m$  と加速度  $a$  に比例する）という運動の第2法則に従った力が接触点を通じて相手に加わります。流体技法や気体技法でも、投げる時や押さえる時に接触点が出来れば同じ法則の支配下に置かれます。

力（ $F$ ）が加わった点（接触点）には、必ずこれと逆向きの力（ $-F$ ）が発生します。これを作用反作用の法則（運動の第3法則）ということは中学校の理科で学んだことです。反作用の力は、必ず作用する力と同一線上（同一作用線上）にあって、大きさが等しく、向きが反対になっているというのがこの第3法則です。

相手と組む前に肩を上げてからストンと落として脱力してから手を取らせたりしても、いざ取らせた手を上げようとする力が入ってしまい、相手（受け）が上級者であれば、「もっと肩の力を抜いて」と注意を受けたりします。それで、再び肩を上下させ、目をつむって、今度は無念無想になったと思って技を施そうとしますが、どうしたものか上級者のようにスムーズに動かさません。力がぶつかるのはこの作用反作用の法則によるので、これでは「いつまでたっても合気道は難しい」と感じたまま長年稽古を続けることになります。

この法則から抜け出すためには、接触点に力を入れないことです。言葉を換えれば、同一線上で相手の力が返って来る接触点を動かさないようにすることです。更にいえば、相手が、こちらの力が伝わって来ると予測している点（相手の気が込められている接触点）を動かそうという意識を持たないことです。

そのために、指先から気を出して臍や臍下丹田を意識して体を捌く、というようなことをしていると思います。その時に動かしている場所が接触点でないというところがポイントです。

固体技法や柔体技法で投げる時にも、例えば入身投げであれば、相手の首に接触している自分の腕で相手を押し倒そうとしないことも同じ理屈です。この段階では、指先を張ってとか、指先から気を出してと教えられていると思います。腕ではない指先に自分の意識を持って行くことで、力を加えようと意識している位置（自分の指先又は指先の方角）と自分の腕と接触している相手の首とが同一線上に来なくなる（同じ接触点で作用反作用の力が生じなくなる）ので、軽く技が施せるようになります。



柔体技法では、手首を取らせるのであれば、その隣の関節である肘を柔らかく動かすということで、体捌きは固体技法と同じです。接触点の力を 0（ゼロ）にする、と理解している人もいますが、そうすることにより作用反作用の法則が当てはまらない状況を作り出しています。固体技法よりも、自分の動き出すタイミングも早くなっています。

これを、相手を無力化するとか無抵抗にすると考えると、万有愛護の心から外れます。出来れば相手を制するとも思わないで、相手と一緒に技を作り上げるというような気持ちであれば、次の段階に上がりやすくなると思います。この段階では、受けの側の人も何が何でも動かされてはなるものかという頑張り稽古をしないように、小指の方で握って、まず、合気道が上達するのに必要な体や動きを作りましょう。

流体技法は、「気を起こして流体素」ですから、手を取らせる前から心の中で 8 の字（∞、無限大の記号、繭形）を描きながら動くというように技の動き始めのタイミングが早い稽古法です。剣で打ち込ませる時の大先生の動きを傍で見ていると、動くスピードはゆっくりしているように見えますが、それで余裕を持って剣を避けてしまうので、動きの起こりが早いのだと思います。そのためには膝を柔らかく使うなど、剣道でいう脛（ひかがみ）、膝の裏を軽く伸ばすということも大切です。

気体技法は、相手が自分の手を取ろう、真っ向両断に斬り付けようとした時には、手が伸び、剣が振り下ろされる前に必ず心の中で「位置について」「用意」「ドン」ということを無意識下で行っているのです、その気を察知して腹中に迎え入れる無抵抗主義、万有愛護の稽古になります。最初は真似事から始めても、意識して稽古している内にそれに近づいて、やがてそれを意識しなくなった時に相手の気が分かるようになるのではないのでしょうか（[https://www.youtube.com/watch?v=vag\\_o-9Mas](https://www.youtube.com/watch?v=vag_o-9Mas) 参照）。

柳生新陰流の活人剣（かつにんけん）では、「相手に十分に働かせ、相手の人中路（正中線）と、自らの人中路を合わせて（**補足** 相手の人中路が自分の人中路に飛び込んで来る）、自らの人中路を截（き）り徹す」ということですから、古くからそのような吸収して一体となる技法があったと思います。この活人剣について、柳生延春宗家は、「正しく使えば、百発百中勝ちます」と言われています。

このような活人剣の働きを知れば、皆さんも、大先生の「合気の稽古はその主となる（主要なる）ものは、気形の稽古と鍛錬法である。気形の真に大なるものが真剣勝負である」という言葉を素直に受け入れられると思います。

## 10) 合気の鍛錬（武道の鍛錬）

「その時以来、私は、この地球全体が我が家、日月星辰（じつげつせいしん）はことごとく我がものと感ぜようになり、眼前の地位や名誉や財宝は勿論、強くなろうという執着も一切なくなった。武道とは、腕力や凶器をふるって相手の人間を倒したり、兵器などで世界を破壊に導くことではない。真の武道とは、宇宙の気をととのえ、世界の平和をまもり、森羅万象を、正しく生産し、まもり育てることである。すなわち、武道の鍛錬とは、森羅万象を、正しく産みまもり、育てる神の愛の力を、わが心身の内で鍛錬することである、と私は悟った」（『武産合気』 p.18）

「この道は、相手と腕力・凶器で戦い、相手を腕力・凶器で破る術ではなく、世界を和合させ、人類を一元の下に一家たらしめる道である。神の『愛』の大精神、宇宙和合の御働きの分身・分業として、ご奉公（武産合気 p.136 の「みそぎのご奉公」）するの道である。この道は宇宙の道で、合気の鍛錬は神業（かむわざ）の鍛錬である。これを実践して、はじめて、宇宙の力が加わり、宇宙そのものに一致するのである」（『合気神髄』 pp.41-42）

この道文の鍛錬は、稽古という言葉では置き換えられないようですので、「合気の稽古」と分けました。

「合気の鍛錬」は「神の愛の力を、わが心身の内で鍛錬する」＝「神業の鍛錬」ですが、「心と肉体と、それをむすぶ気の三つの鍛錬」でいうと「心の鍛錬」「気の鍛錬」になるかと思います。

大先生がおっしゃられる（水行、滝行などの禊行とは別で、禊の技という言葉で使われている）「禊」がこの鍛錬のことです。自分の気を整える（愛の気を充満させる）ことが神業の鍛錬（禊）で、これはまた自己と一体になっている宇宙の気を整えることにもなるので、合気の技は禊の技（禊のご奉公）、小戸の神業といえます。

「息を吸い込む折には、ただ引くのではなく全部己れの腹中に吸収する。そして一元の神（万有愛護の神）の気を吐くのである。それが社会の上なれば、自己の宇宙に吸収して、社会を神の（愛の）気で浄めるということになる」（『合気神髄』 p.14）

「一人一人が心の洗濯をし、心の立て直しをする。世界から戦争、喧嘩（けんか）をなくす。それが小戸（おど）の神業（かむわざ）である。…（生み出された愛の気の）ひびきが全宇宙に広がっていくように鍛錬しなければならぬ」（『合気神髄』 p.20）

「これによって、誰に頼まれなくとも自己のつとめの上に、世界の何ものよりも先に立って、みそぎのご奉公（合気神髄 p.42 の「ご奉公」）をするのであります。…それは自己の六根を磨き上げて（鍛錬して）自己の魂を光らせること（合気神髄 p.125 の「愛より熱も出れば光も生じ」）です」（『武産合気』 p.136）

「この大いなる合気の禊（みそぎ）を感得し、実行して、大宇宙にとどこおりなく動き、喜んで魂の錬磨にかからねばならぬ。…人を直すことではない。自分の心を直すことである。…真の武道とは宇宙そのものと一つになることだ」（『合気神髄』 p.115、p.150）

「みそぎの技として、合気は最後の愛行のために生まれたものなのである。…万有愛護の使命の達成をのぞいて、合気の使命は他にありません」（『武産合気』 p.140）

この「万有愛護の使命の達成」の部分が、柳生新陰流の活人剣も含め、「過去現在にない」「これまでの武道はまだ充分それに達してはいなかった」ところです。その使命達成のためには、仏道でいえば「無」ではなく「衆生済度」を求めることです。大先生の別の言葉でいえば「合気道は世のため人のために」を心掛けることです。

禊は気形の稽古（気体技法）を生きたものにするために欠かせない心の鍛錬です。

皆さんは、次の道文と併せてこのところを何度も読んで理解を深めて下さい。

「本当に美しい地上天国実現のために、今度（万有愛護の）精神にそって立つ武には、殺生の技はない。つまり、自然の摂理によって、魂魄あわせた引力によって、いかなるものも自己の腹中に吸収され、自己の思うままになるために大きなみそぎの本義がいる。これが（武産）合気です」（『武産合気』 p.162）

「（武産）合気と申しますと小戸（おど）の神業（かむわざ）である。こう立ったなれば、空の気と真空の気を通じてくるところの、宇宙のひびきをことごとく自分の鏡に映しとる。そしてそれを実践する。相手が歩いてくる。相手を見るのじゃない。ひびきによって全部読みとってしまう（註 山彦の道）」（『合気神髄』 p.119）

「喧嘩争いのない戦いのない平和な美しい楽土の建設に、この大きなみそぎの大道をもって現わさなければならぬ。…顕、幽、神三界の万有万神の定理を明らかにして、この世界の動きと共に相和して、この世の汚れをはらってゆくことが、この武産合気の本義であります」（『武産合気』 pp.181-182）

大先生は、後進に対して次のように望んでおられます。

『さむはら』とは宇宙の気を整えて世の歪みを正すことである。日月星辰、人体ことごとく気と気の交流（結び）によって生まれたものである。ゆえに世界、宇宙の調整をしなければ邪気を発して、いろいろと災いがおきるのである。この邪気は禊（みそぎ）によって正しくしなければいけない。我が国は古来、禊祓（みそぎはらい。禊：罪を清める、祓：穢れを落とす）をもって大儀式を行って祓う。…禊は、はじめに（禊祓の儀式で）述べたように立て直しの神技の始めに行ずるのであるが、（自分の心の）禊（みそぎ）をして精神の立て直しをすることは特に合気道を学んでいる各自にお願いしたい。日々必ず修業してほしいと思う」（『合気神髄』 p.152）

この禊については、何かを削り落とすことと何かを身の内で養い育てることとの両方が求められているように思います。相手に勝とうとする心、倒そうとか投げようとかする心は削り落とし、相手を受け入れ、宇宙（神といっても良い）と一体となり、同化しようと思う心を育てることを稽古の中で行うことでしょうか。そのようにすることが技の上達にも役立ち、人格の向上に繋がること（相手が自分と組むことを避けなくなることで）理解出来たら、取り組みに弾みがかかることでしょう。

ところで、大先生が「気形の稽古と鍛錬法（稽古法 and 鍛錬法）」と言われているので、気形の鍛錬法と呼ばれるものが稽古法とは別にあるようです。私は、気形から連想して、これは「気の鍛錬」に分類されると思います。

気形の鍛錬法を道文の中から探すと、次の修法（鎮魂行法）がそれを指しているのではないかと思います。

「武道と神ながら（註 武産の神示「愛の氣結び」）の道、これまでの武道はまだ充分それに達してはいなかった。なぜなら、今までの時代であり、土台固めであったからです。すべて目に見える世界ばかり追うと今までのようなことになり、それではいつまでたっても争いが絶えない。目に見えざる世界（註 気形と同意、魂）を明らかにし、この世に平和をもたらす、それこそが真の武道の完成であります。修法は、指を（鎮魂印に）結び目をつぶって下さい。すべて心が定まってくると姿が変わって来る（イメージされるようになる）。深呼吸のつもりで魂で宇宙の妙精（清新の気というよりも愛の気）を集め、それを吸収する。…まず自分の腹中を眺め、宇宙の造り主（の愛の心、愛の気）に同化するようずーと頭に集め、造り主に聞く。すると気が昇って身中に火が燃え、靈氣（神の愛の力）が満ちて来る」（『合気神髄』 p.128）

気の鍛錬はメンタル面を強くするという意味（何ものにも何事にも動じない胆力を養うという意味）の精神力、気力の鍛錬ではなく、愛し慈しむ心、平安な心に関連した愛の気の鍛錬です。科学的に言えば脳波をミッドα波（α2、9～11Hz）にする鍛錬のことを述べておられるようです。

この鎮魂行法は、白井亨の鍛錬法の内観法に当たるものだと思います。白井亨の場合、最初、水行（水垢離）によって心の鍛錬・気の鍛錬をしていましたが、体を壊してから内観法、軟酥の法に加え徳本行者に付いて南無阿弥陀仏の唱名（念仏行）も行っています。

大先生も水行や滝行もされましたが、鎮魂行法をされ、祝詞も上げられました。いずれも瞑想法に加えて声を出されたことが良かったのではなかったかと思います。

科学的に分かっていることは、「愛」「感謝の心」そして「笑い（笑顔）」などが脳波を安定させるそうです。また、このような丹田を意識した呼吸法（内観法）も、15～30分位続けると脳波計でα2が観測されるようになることが知られています。

$\alpha 2$ が出るとセロトニンの分泌が促進され、「相手が向かわない前に、こちらでその心を自己の自由にする。自己の中に吸収してしまう。つまり精神の引力の働きが進むのである。世界を一目に見るのである」(『合気神髄』p.15)という武道に欠かせない集中力が身に付く(ゾーンに入る)ようになるようです。「これを実践して、はじめて、宇宙の力が加わり、宇宙そのものに一致するのである」という状態になるようです。

大先生は、「私は人間を相手にしていないのです。誰を相手にしているのか、強いて言えば神様を相手にしているのです。人間を相手にしてつまらぬことをしたり言ったりするから、この世は上手く行かないのです」(『合気道技法』p.262)と語られていますが、これは、神様や仏様(サムシング・グレートでも結構です)の存在を信じられる人にはよく分かると思いますが、鍛錬する上で欠かせない心掛けだと思います。脳波を乱さないため増上慢に陥らないために忘れてはならないことです。

相手より強くなろうという執着を捨て、神様が与えられたままの自分と向かい合うのです。そうすると感謝の念が湧いてきて、造り主と同じ万有を愛する気持ちが強くなって来ます。

気の鍛錬は、心と体に活気を与える気(エネルギー)を練る鍛錬です。気が流れるようになると血液の流れが良くなり、体の機能が高まります。心にやる気が湧いてきます。

また、このエネルギーは心(意識)によって導かれ、左右されます。正に「志は気の帥(すい)なり」(孟子 公孫丑上)です。万有愛護の心によって気を導き、気形の稽古によってそれを確かなものにして行きましょう。

ここでは難しいことを書き連ねていますが、稽古では笑顔で心から楽しいなという気持ちを溢れさせて稽古したいと思います(稽古は常に愉快に実施するを要す)。

私の家族が癌になってから行った病院で笑顔共和国 <http://www.egao-kyowakoku.co.jp/index.html> というものがあることを知りました。笑顔共和国憲法やスマイルトレーニングなどのメニューを是非ご覧下さい。「宇宙の気をととのえ、世界の平和をまもり」ということと「笑顔が、家庭内から始まり、社会へと自然に広がる」ということは、脳波で考えると同じことを言っていると思います。また、潜在意識は水面下で皆が繋がっているともいわれています。

稽古は、皆さんが地上天国にいる気分を味わうものでありたいと願っています。また、気形の稽古に移るためにも、上級者は「そら動かないだろう」とか「それでは駄目です」とかいう相手を否定する言葉を使わず、気持ち良く受身を取って、「おっ、今のはイイネ」と言って後進を導きたいと思います。

もし、動かせない、容易に技に掛かってくれないような人に会った時には、相手が上級者であれば、どうしたら出来るか、自分の技のどこをどう直すべきかを教えてもらえる絶好の機会だと思って尋ねると良いと思います。そうするとたちまち道場が地上天国に変わります。相手が下級者であれば、これも工夫をする機会、自分が稽古をさせて頂く絶好の機会が与えられたと受け取ることです。すべてそのように受け止めれば、この鍛錬が実りを迎えるようになると信じています。

補足ですが、英語で稽古というと **practice**、**training**、**exercise**、**lesson** などがあります。この内 **practice** と **training** は次のように明解に使い分けられているそうです。

**practice** (一度身に付いたら無くならないことを身につける練習、自転車に乗れるようになるための練習など、運動神経などの神経系に対するアプローチ)

**training** (継続していないと無くなってしまふものの訓練、筋肉系に対するアプローチ)

このように分けて考えて稽古法を吟味すると、稽古の実効を上げることが出来ると思います。

鍛錬については宮本武蔵の有名な言葉があります。

「千日（せんじつ）の稽古を鍛（たん）とし、万日（まんじつ）の稽古を練（れん）とす。能々（よくよく）吟味有るべきもの也」（『五輪書』水之巻）

稽古に稽古を重ねることが鍛錬であるという意味だと思いますが、英語に訳すと、鍛を **discipline**（精神修養などの訓練、**mental discipline** で精神の鍛錬）、錬は **refining**（磨きをかけること）としているものがありました。

これまでのところでは、大先生が言われる鍛錬（神の愛の力を、わが心身の内で鍛錬すること）と武蔵が定義したものとは少し目的とするところが異なるようです。

吟味有るべきとは、考え、調べ、良いものを選ぶべき、又は見出すべきという意味で、工夫すべきということです。

一般的に、鍛錬の方が稽古よりも広い意味で使われています。例えば、「合気道練習上の心得」（『合気道のこころ』p.145）には「合気道は心身を鍛錬し」と書かれており、「三つの鍛錬」（『合気神髄』p.164）にも「己れの心を宇宙万有の活動と調和させる鍛錬」「己れの肉体そのものを宇宙万有の活動と調和させる鍛錬」「心と肉体とを一つにむすぶ気を、宇宙万有の活動と調和させる鍛錬」とあって、心と肉体及び気を鍛えることをすべて鍛錬と言っています。

「手がふれたら指一本で抑えることが出来た。この時、ウナギ掴み、すなわち気でもって相手を抑える即位づけ（昭和 32 年刊『合気道』p.185 の続飯づけ。「即ち位付け」は誤り）の妙法を覚ったのである。こうして合気の真の鍛錬法が出来てきたのである」（『合気神髄』p.164）は、「気でもって相手を抑える」ですから、気の鍛錬のことを指しているようです。鎮魂行法よりも、もっと技への応用が進んでいると思います。

『絶対不敗の武、「合気道」 植芝盛平という「大宇宙」』という題の文章が『秘伝』1997 年 9 月号に掲載されました。特集で、「伝説の大先生を、深遠な術理をいま改めて検証する」という副題が付いています。ペンネームを桑沢慧という方が書かれています。剣道四段（当時）の方です。そこに興味ある実験が書かれていましたので、長くなりますが引用します。

「かつて、私は普段の剣道の稽古である実験を試みたことがある。実験といっても、それは技術的なものでもなければ、稽古内容に工夫を凝らしたのでもない。攻め合う際の、心のあり方を変えてみたのだ。それまでの私は高段者に対してはいうに及ばず、先輩や朋輩たちにもいいように打たれる一方で、逆襲しようとむきになればなるほど、その状況は悪化の一途をたどった。無心になれ、とアドバイスをもらい、それには禅が一番なのだろうと短絡的に考え、ただ座することに集中してもみたが、付け焼き刃の座禅などをいくらやったところで邪念が踊るばかりで、無心の心境などになれるはずもなかった」

「打たれまくる原因を自己分析するに、どうも私は戦闘に徹することが苦手なようだった。闘争本能が先天的に欠落しているのか、たとえ自分ではどんなに熱くなっているつもりでも、心のどこかが冷めていて、本心から相手を倒す行為に没入できない。それが身体の隙となって現れ、相手にとってはいともたやすく打つことができるらしい。これは格闘技をやる上では致命的な欠陥だ。心の冷めた部分を何かで埋めないと、現状は打開できない。そこで考えたのは、相手を敵とは思わず、むしろ逆に『あなたが好きだ』と思うことだった」

「『攻めが変わった』と言われるようになったのはこの実験を始めて間もなくだった。私自身、相手の目を

見続けることができるようになったことと同時に、相手の動きが実によく見えるようになり、一方的に打たれまくるという醜態から次第に遠ざかっていった」

「その内、私の変化に気づいた師範代や朋輩たちが、何か特別な訓練でもしているのか、と尋ねてきた。私は正直に答えるのが面はゆく、言葉を濁していたが、ある日親しい朋輩に実験のことを打ち明けた。ところが、あなたが愛しい（あなたが好きだ）と思いながら稽古している、と言うと気味悪がられてしまい、冗談ということにされてしまった。我々日本人は愛という言葉を男女間の恋愛に限定して捉えがちなことが、争っているときに愛しく攻める、という矛盾した行為への理解を妨げているように思えた」

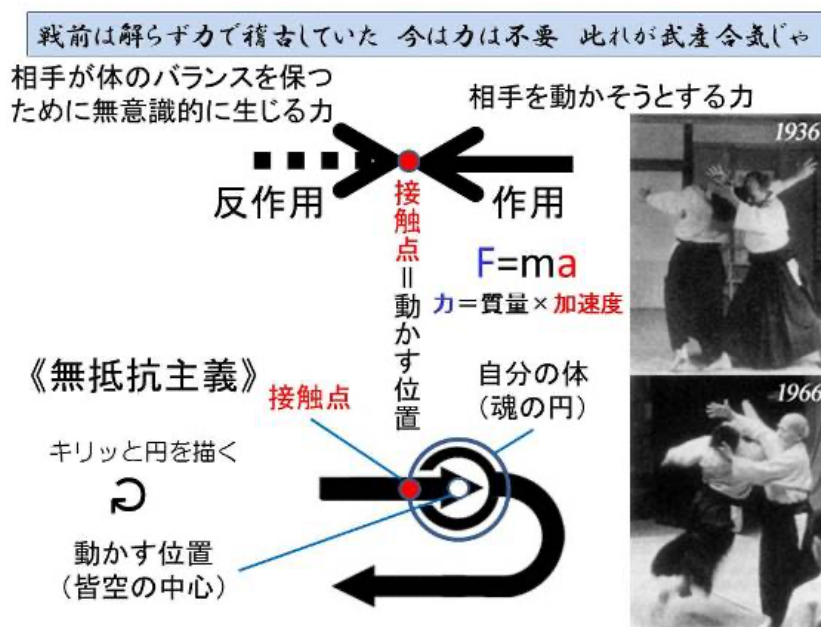
「盛平翁の言う愛気と『従来の武芸者が口にするのとは違う』合気との関係を、以下のように理解した」

「相手が放つ気がいかに大きくても、それが殺気であっても、従来の武道のように合気を外すことなく、愛気を以て相手と気を合わせる。殺気と殺気のぶつかり合いならここで勝敗のやりとりになるのだが、愛気は殺気をも呑み込んでしまうので、攻撃をしかけた方が負ける。なぜなら殺気とは勝ちたいという欲望から発する個人的な欲求であり、目的を果たせば消えてしまう一過性のものだ。これに比べ、愛気は自分を倒しに来る相手をも生かそうとする慈愛の心、言い換えれば過去から現在、そして未来へと繋がっている生命の連続性を慈しむ心から発しているため、各々が内包する時間に一瞬と永遠の違いがあり、一瞬に賭けて欲望を満たそうとした相手は、永遠の中に吸収されるようにこちらに気を飲まれてしまい、その結果が負けという形で現出する。盛平翁が『争おうという気持ちをおこした瞬間に敵はすでに破れている。そこには速いとか、おそいとかいう時の長さが全然存在していない』とするのも、こう考えれば理解できる」

この実験が、相手を動かそう、相手を投げよう、相手を倒そうという気持ちから離れて、大先生の言葉のとおり稽古をすることを促すものになれば良いと思います。そして、相手から「何か特別な訓練でもしているのか」と尋ねられるようになると一層の励みになると思います。

合気道は試合を行わないので、勝ち負けという結果は分かりませんが、稽古の中で万有愛護の心で相手を包み込むことは出来るはずです。愛おしいという気持ちは、孫が懷に飛び込んで来るのを抱き留める時の気持ちと同じです。目に入れても痛くない孫なら、空っぽにした腹中に入れるのは訳がないことだと思います。皆さんは、どうぞ工夫をしてみてください。

工夫は鍛錬の重要な要素だと思います。工夫の際の参考になればと思い次の図を示しておきます。



以上から、大先生は、稽古法、鍛錬法についても（多分、ノートに）しっかりとまとめられて道文にされていることが分かります。「大先生の合気」ということで道文を手掛かりに調べてみましたが、これで確かに大先生の合気、大先生が開かれた独自の合気の道が確立されたことが分かって頂けたかと思います。

## 11) 武道の奥義、合気道の極意

道文に「合気の○○」と書かれていなかったのも、大先生の合気のリストには載せませんでしたが、「武道の奥義（奥儀）」「武の奥意」や「合気道の極意」「武の極意」、或いは単に「極意」という言葉で述べられている部分があります。

ちなみに「合気道練習上の心得」を除き「秘伝」という言葉は使われていません。

これまでに引用した部分とも重なりますが、＜奥義＞と＜極意＞に分けて抜き出します。このように分けてみると、大先生が言葉をかなり厳密に使われていることが分かります。注意してお読み下さい。同じことを述べられている部分もありますが、大先生がそれだけ概念をきちんとまとめられていたと思って読むと、涙が出てきます。

### ＜奥義＞ 「結びの技、岐美の神業」

「(昭和 20 年(1945)の白い幽体との稽古の後) 新たに、日をおいて立つと、木剣も自分も光の雲もなく、宇宙一杯に自分が残っているように感じた。その時は白光の気もなく、自分の呼吸によって、すべて宇宙の極が支配され、宇宙が腹中に入っていた。これが宗教の奥儀（奥義）であると知り、武道の奥儀も宗教と一つなのであると知って法悦の涙にむせんで泣いた」(『武産合気』 p.131)

「念を去って皆空の気にかえれば生滅（しょうめつ、勝ち負け）を超越した皆空の御中心に立ちます。これが『武道の奥義』であります」(『合気神髄』 p.80)

「また、念を五体から宇宙に気結びすれば、五体は宇宙と一体となって、生滅を超越した宇宙の中心に立つことも出来る。これが武道の奥義である」(『合気神髄』 p.105)

「武道の奥義は、念を五体から宇宙と気結びし、同化して生死を超越し、宇宙の中心に立つことである」(『合気神髄』 p.175)

「今迄の私の武の奥意（奥義）は一剣に生殺与奪の力を集め、相手を自己の想うままにして、栄えの道と喜びの道の案内をすることであった」(『武産合気』 p.128)

### ＜極意＞ 「禊の技、小戸の神業」

「合気とは、敵と闘い、敵を破る術ではない。世界を和合させ、人類を一家たらしめる道である。合気道の極意は、己を宇宙の（万有愛護の）働きと調和させ、己を宇宙そのものと一致させることにある。合気道の極意を会得した者は、宇宙がその腹中にあり、『我は即ち宇宙』なのである」(『武産合気』 p.13)

「とにかく宇宙の営みの霊波のひびきをよく感得することです。技はそのひびきの中に生れるのです。だからして道歌に、

日地月（にっちげつ） 合気になりし橋の上 大海原は山彦の道

天地は汝（な）れは合気とひびけども 何も知らずに神の手枕

武とはいえ 声もすがたも影もなし 神に聞かれて答うすべなし

と歌った。

極意とは自分を知り、理を究めて、合気をもってみそぎの技とするのです」(『武産合気』 p.135)

「合気道の極意は、己れの邪気をはらい、己れを宇宙の動きと調和させ、己れを宇宙そのものと一致させ

ることにある。合気道の極意を会得した者は、宇宙がその腹中にあり、『我はすなわち宇宙』なのである。そこには速いとか、遅いとかいう、時間の長さが存在しないのである。この時間を超越した速さを、正勝（まさかつ）、吾勝（あがつ）、勝速日（かつはやひ）という。正勝、吾勝、勝速日とは、宇宙の永遠の生命と同化することである。

では、いかにしたら、己れの邪気をはらい、心を清くして、宇宙森羅万象の活動と調和することができるであろうか。

それには、まず宇宙の心を、己の心とすることだ。宇宙の心とは何か？ これは上下四方、古往今来（こおうこんらい）、宇宙のすみずみにまで及ぶ偉大なる『愛』である。

愛は争わない。愛には敵はない。何ものかを敵とし、何ものかと争う心はすでに宇宙の心ではないのである。

宇宙の心と一致しない人間は、宇宙の動きと調和できない。宇宙の動きと調和できない人間の武は、破壊の武であって真の武ではない。

真の武道には敵はない、真の武道とは愛の働きである。それは、殺し争うことでなく、すべてを生かし育てる、生成化育の働きである。愛とはすべての守り本尊であり、愛なくばすべては成り立たない。合気道の道こそ愛の現われなのである」(『合気神髄』 pp.34-35)

「合気というものは、森羅万象どんなものでも、極意に取り入れなくてはならない。取り入れるのではなく、教えを受けなくてはならぬ。…森羅万象は武道における大いなる教えであります。これを見のがしてはいけない。神が表（おもて）に現れるということは、(万有愛護の)精神がことごとく天地に光っているということだが、皆、これを理解しない。…きれいな心になってしまえば何でもないが、しかしそれは容易なことではない」(『合気神髄』 pp.57-58)

「今までは形と形の物のすれ合いが武道でありましたが、それを土台としてすべてを忘れ、その上に自分の魂をのせる。自分に愛の心が無かったら万有愛護の大業は成り難く、愛のかまえこそ正眼の構えであります。無形の真理、日本の武道は相手を拵（こしら）えてはいかぬ。無抵抗主義、これこそ霊界の処理法であり、念彼（ねんぴ）観音力と申します。武の極意に形はない。心自在に生ず。気は一切を支配する源・本であります」(『合気神髄』 p.129)

「宇宙の気はすべて魂の円におさまります。おさまるがゆえに技も無限に包蔵され、生み出すこともできます。これが合気の魂の円であります。

この魂の円がなければ栄え、また精進、魂魄（こんぱく）和合のはこびはできません。これがなければすべて五体への還元はなくなるのであります。魂の円（原文は円の魂）の皆空は宇宙一体に帰します。

これは合気の武の根元であります。魂の円を体得した極意には、相對の因縁動作を円に抱擁し、掌（てのひら）に握るごとく、すべてを吸収します。己に魂があれば、人にも魂があり、これを気結び、生産びして円の本義の合気を生み出させれば、円はすべてを統合します。いかなるものも自由にとけるのが円であります。

円の極意は皆空の中心をつき、技を生み出すことにあります」(『合気神髄』 p.121)

「目に見えざる世界（気形）を明らかにして、この世に和合をもたらす。それこそ真の武道の完成であります。今までは形と形のもののすれ合いが武道でありましたが、それを土台としまして、すべてを忘れ、そのうえに自分の魂をのせなければなりません。愛の心が無かったなら万有愛護の大精神の大業は成り難く、愛のかまえこそ正眼の構えであります。無形の真理、日本の武道は相手を拵（こしら）えてはいけません。武の極意は形ではありません。心は自在に生じ、気は一切を支配する本源であります。…橘の小戸（おど）の神業（かむわざ）、禊（みそぎ）の技、これが合気道です」(『合気神髄』 pp.154-155)

「私は武道を通じて肉体の鍛錬を修行し、その極意をきわめたが、武道を通じて、はじめて宇宙の神髄を掴んだ時、人間は『心』と『肉体』と、それを結ぶ『気』の三つが完全に一致して、しかも宇宙万有の活

動と調和しなければいけないと悟った。『気の妙用』によって、個人の心と肉体を調和し、また個人と全宇宙との関係を調和するのである」（『合気神髄』 p.178）

数年前、地域社会指導者研修会で教えを受けた師範に「道主は、大先生から一子相伝で秘伝のようなものを受けられているのですか」とお尋ねしたことがあります。その師範のお答えは「そのようなことはないと思います。皆、自分で見出すものです」でした。

大先生が難しいお話をされた後で技を示演される時、そのお話と技とは必ず関連があったはずです。そして、多岐にわたる形而上学的なお話も形而下の技のポイントにすると、ほんの数点にまとまると思います。それだけでなく、とっさのときに技が役に立たないと思う故です。

そのような観点から、この「奥義」と「極意」の二つを自分で概念化し、それが技にどう結び付いているかを研究してみてください。

大先生のお言葉から何かを見出すそうとするのは、まるでジグソーパズルを組み立てているような感じがします。しかし、大先生は言葉の使い方が厳密なので、何とかはめ込むことが出来ると思います。ジグソーパズルは外枠（フレーム）がないと格段に難しくなります。それで、皆さんが自分なりに理解しようとされる時、私のこのまとめをそのフレームとして使って頂けると、途中で放り出さなくて済むのではないかと期待しています。

大先生の教えを学ばれる時の皆さんの目の輝きに力づけられ、私もやっどこまで辿り着くことが出来ました。感謝しています。

以上述べた大先生の合気が大東流の合気から見たらどうなのかということが大東流の佐川幸義宗範によって検証されていますので、それを加えて締め括りしたいと思います。

このことは、『透明な力 不世出の武術家 佐川幸義』、『孤塁の名人 合気を極めた男・佐川幸義』、『大東流合気武術 佐川幸義 神業の合気 一力を超える奇跡の技法“合気”への道標』などを読むと目に入ってきます。

私は大東流を習ったことはありませんし、佐川宗範も存じ上げません。佐川宗範の技の動画は撮影されていないようですが、本に写真が載っていて、そのわずかな知り得る範囲内でも大東流内では卓越された方だと思います。惣角師の没後、宗家を継がれ、武田時宗師にその宗家を譲られてから総師範という意味の宗範という称号を与えられていることから、関係者が認める確かな方だと思います。武道家としても、修行に取り組む姿勢が真摯で、自分を厳しく律しておられ、武田惣角師の名誉を守ろうとされている姿も尊敬に値すると思います。

それだけに何故、合気上げで大先生の両手首をつかみ、大先生が手を上げられないと見て、面目を失わせないため「最後には悪いから手をあげさせてあげた」というようなことを他人に吹聴するのかということが長い間の疑問でした。

幕末の剣聖 男谷精一郎は、必ず試合で 3 本に 1 本は相手に勝ちを譲ったことで有名ですが、その場合、決して打たせてやったというようなことは言わず、「お見事でござる」とか「参った」と言って相手を立たせよう。その点で、佐川宗範に対して武道家らしからぬという印象を抱いてきました。

しかし、よくよく読んでみると、これは勝負をしたのではなく「（武田惣角）先師のような合気が植芝にあ

るかどうかを知りたくて」ということが目的であったと書かれていました。その結果、大先生には惣角師のような合気が全くないことを確認して手を上げさせた、と内部の人に語ったことが本に載ったようです。大東流の合気に対する佐川宗範の目は確かなようですので、これで少なくとも大先生の合気は大東流の合気とは違うということが認められました。

しかし、大先生がご自分でおっしゃられている（これまでにまとめた）合気がないかという、そうとは言えません。

大先生は、今武蔵と恐れられた國井善弥師に、合気道はインチキだ、許しておけないと思って勝負を挑まれた時、「國井先生、よくいらっしゃった、さあどうぞ道場の看板を持ってお帰り下さい」と切り出し、その言葉を聞いた國井師が、バツが悪くなって苦笑いしながら引き上げたというエピソードのある方です。佐川宗範のときも、その意図を察していて対応されたと思います。惣角師が「植芝には合気は教えていない」と言っていたそうですので、大先生が惣角師の合気は示せなかったはずで、手首をつかまれた時に上げられませんかという反応をされたと思います。このことで、佐川宗範も満足したはずです。

この時は大東流の宗家も（大同団結を呼び掛けるため）同席しての上のことです。佐川宗範は、合気道は大東流の一派と考え、大東流内部のこととして惣角師の合気（**補足** 宗範は惣角師が作ったのであろうと言っている）を大先生が会得しているかどうか確認しようとしています。大先生は、それに応じて大先生の合気で手を上げると、合気道と大東流の優劣を争うことになるとはっきりと認識されていたことでしょう。確かに大東流の合気はマスターしていなかったでしょうから、手を上げるなら合気道の理合で上げることになってしまいます。そして、そのことは佐川宗範には直ぐに分かってしまうことです。

皆さんならこういう時にどうされるかですが、大先生が執られたこの二つの対応に共通するところは敵を作らない、争わないということのようです。大東流とは事を荒立てないで（自分の方から口に出さないで）、静かに去らせて貰いたかったのではないのでしょうか。

昭和 6 年(1931)4 月に惣角師の教授を受けた後は、惣角師が来訪されても居留守を使ったりされたようですが、これもやんわりとした意思表示ではなかったかと思います。昭和 7 年(1932)7 月 26 日に大本内に大日本武道宣揚会が創立（8 月 13 日発会）され、大先生が会長となっているので、居留守はこれ以降のことではないかと思います。出口王仁三郎聖師が惣角師に対して「血の臭いがする」と言って、人間的には余り好まれなかったことと無関係ではなかったかと思います。

「いくら精神力とか気の流れとかいったってそんなもので自分よりはるかに大きい者を倒す事はできるものではない」とか「合気は気の流れなどといった考えからは、いくら何をやっても出てこない」というのが佐川宗範の大東流の合気から見た大先生の技に対する評価です。

倒すことが出来るか出来ないかは別にしておいて、このことで宗範といわれる人から合気道は大東流の一派ではないとみなされる（惣角師の合気を受け継いでいないと判定される）ことになりました。

これは昭和 31 年(1956)のことでしたが、佐川宗範にとっては大東流の合気が大先生にないということを確認する機会となり、合気道側から見れば、晴れて大東流と合気道は違うということが宗家にも佐川宗範にも受け入れられることとなりました。

双方にとって Win-Win ですので、これからも大東流は大東流、合気道は合気道として認め合って行けば、日本の武道界にとってプラスになると思います。

大先生の技については、私も昭和 42 年（1967）4 月 9 日に間近で拝見しました。目にしたのは気形の稽古の動きそのものでした（同じ時期の動画 <https://www.youtube.com/watch?v=XoDK3XuvZWw> 参照）。弟子の剣を

額に当てておいてから、弟子がその位置から降り下ろす剣をスッと避けて、手に持った扇子で面を突くと、**2、30 cm** 扇子から顔が離れているのに、弟子がパッと仰け反って受身を取って倒れていました。立技呼吸法では、大先生の手を取ろうとする弟子の手が **60 cm** 位離れていましたが、大先生が弟子の方を見ないでパッと手を振ると、これも弟子が大先生の手に触れないまま後ろに倒れていました。

私も、佐川宗範ではありませんが、触れてもいないのに倒れるのは弟子が勝手に受身を取っているからではないかと疑問に思い、後になってからですが、教えを受けていた直弟子であった師範にお尋ねしました（弟子が大先生の腰に手を当てて押すのもありましたが、この時は畳表に皺がよる程弟子の足に力が入っているのが分かりましたので、不思議でしたが疑問に思うことはありませんでした。）。

その時、師範は、次のようなエピソードを話して下さいました。

「大先生が顔の前で腕を振られると腕が太い丸太のように見え、パッと手を上げられると手がグローブのように大きく見えるのです。それで、離れていても直ぐ目の前に大先生の腕や手が来ているように感じて受身を取るのです。ある時、それを不思議に思った弟子が、目をつむっていたらどうなるだろうかと考え、大先生が向こうを向いたまま手を振られた時に目をつむりました。案の定、直接当たっていないので、上を向いて目をつむったまま、その弟子は飛ばされないで突っ立っていました。そしたら、ボタンという音がしないので後ろを振り返った大先生が、『馬鹿者！（真剣勝負で目をつむって、じっと突っ立っている馬鹿がどこにいるか）』と怒鳴られ、仰向き加減になっている顔を上から手で叩かれたら、グシャッというような音がして、弟子が畳に叩き潰されていました。そして、その後 **2、3 日** フラフラしていました」

宇宙と一体となった自分の腹中に相手を吸収して同化する（宇宙に結ぶ）大先生の合気は、実際に大先生のお話のとおりであったのです。それは、佐川宗範の見ていたとおり大東流の合気とは異質の理合に拠るものです。大先生が「私は今まで、各流儀を三十流ほどやりました。柳生流の体術をはじめ、真揚流（天神真揚流）、起倒流、大東流、神陰流（加藤田神陰流）などいろいろやりましたが、合気はそれらを総合したものではないのであります」（『合気神髄』 pp.31-32）とおっしゃられているとおり今までにないものです。

皆さん、確かに大先生は新しい道を開かれたということが理解出来ましたら、これまでの「大先生の合気」を最初からもう一度読まれ、概念を自分の言葉でまとめてみて下さい。そして「今迄の武道は、年期を入れないと自分（註 真我、愛の存在）になれなかったのですが、私はすぐにも了解し得る道を開いたのであります。それだけ今迄の武道と合気道は違うのであります」（『合気神髄』 p.70）と言われているので、それを稽古に取り入れられるようにしましょう。

以上はブログで発表したものを若干修正したものです。

（文責： 八千代合気会 乾泰夫）